

友の年青  
事記勝名

金港堂 刊

022572-000-2

特28-961

青年の友 一名勝記事一

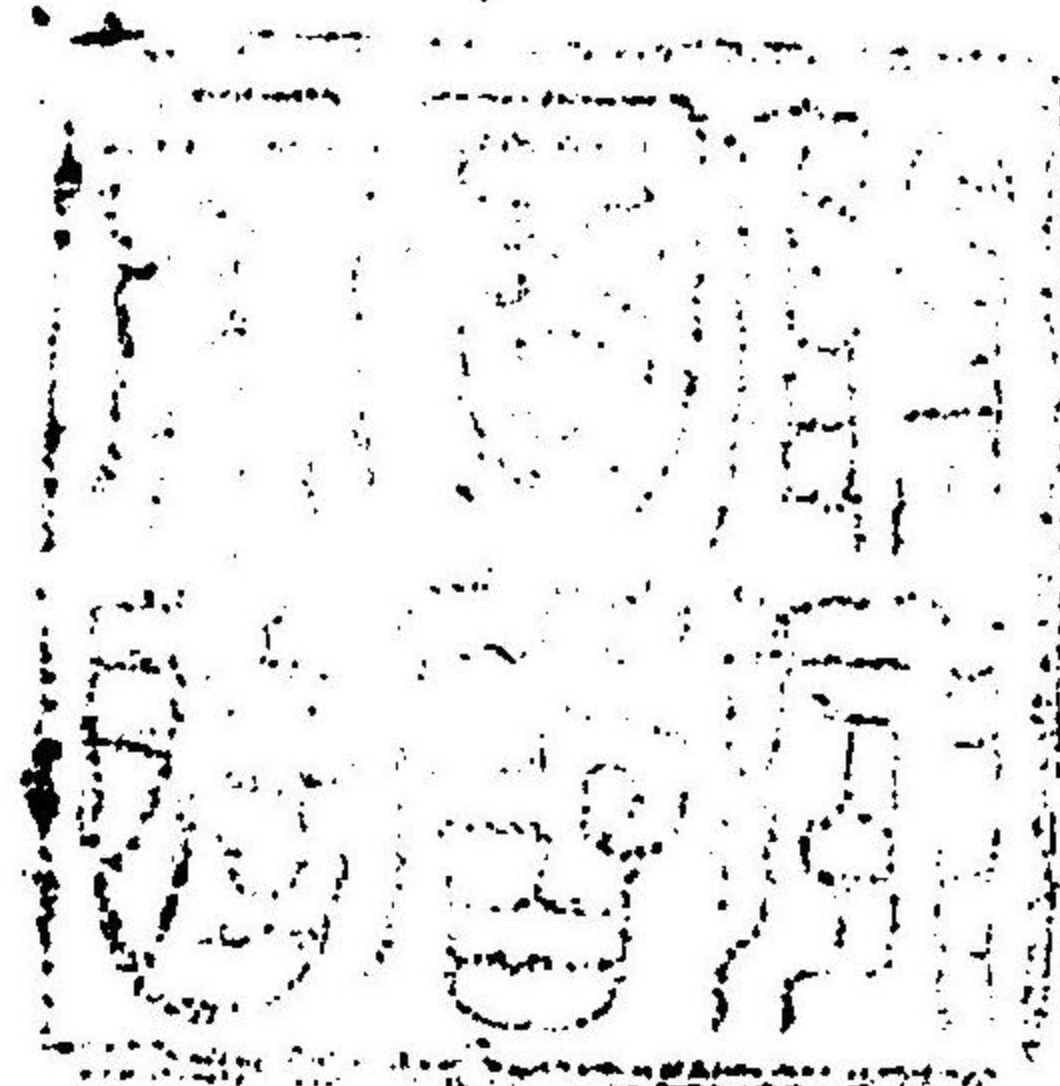
金港堂 / 刊

M35

ADB-0270



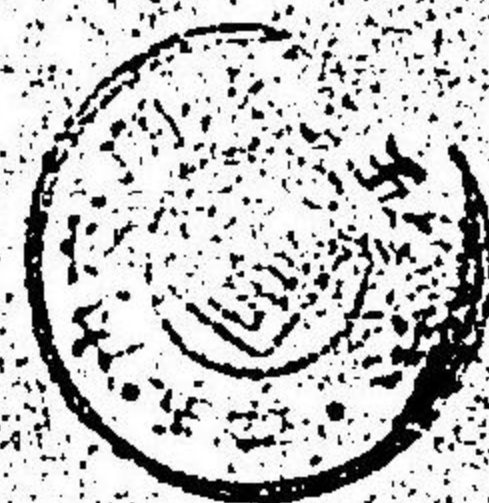




手記 全勝記事



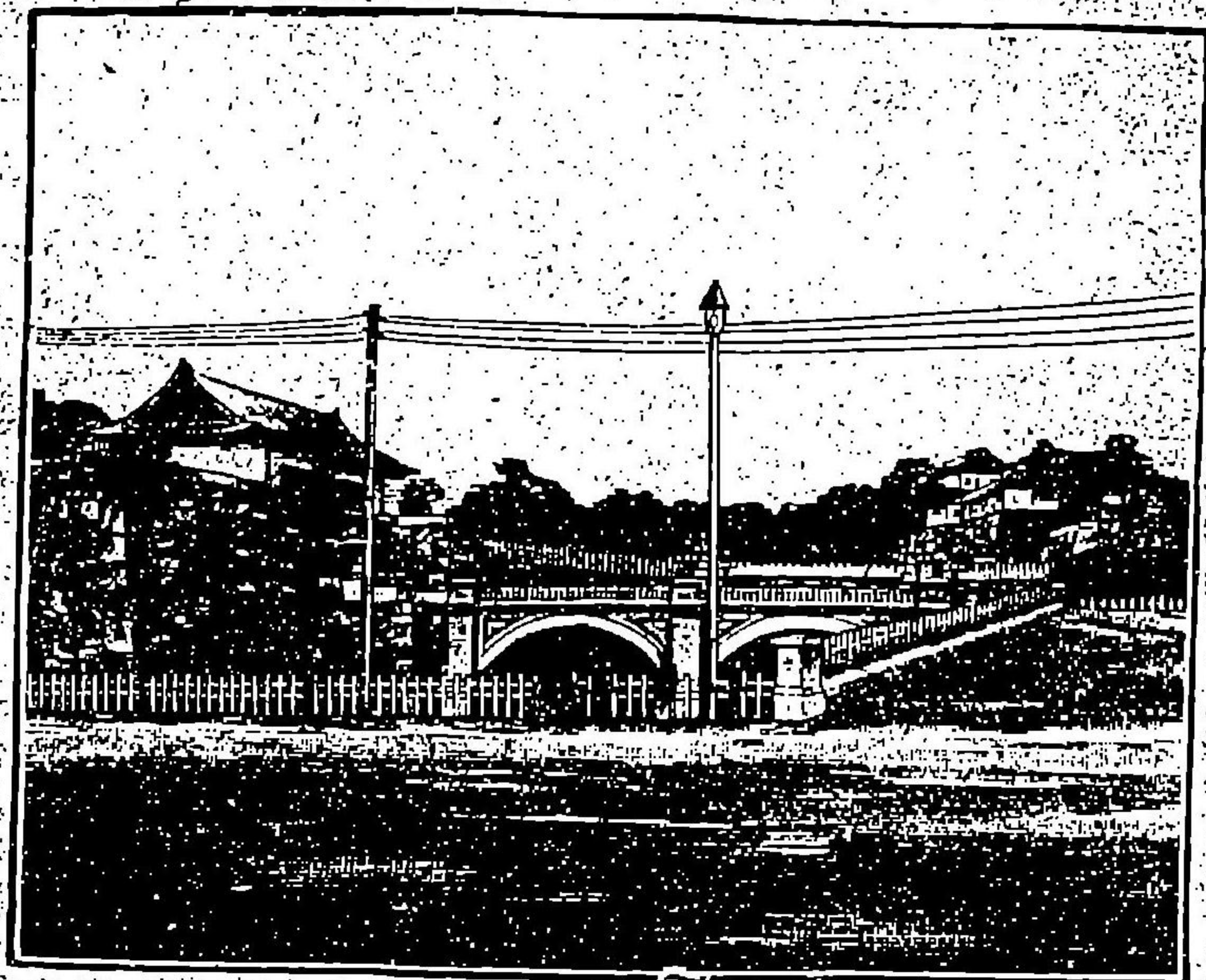
東京は武蔵國の東南部に在りて、隅田川の流にまたがり、前は  
 東京灣に臨み、後には關東平野の沃土に連れり。東西二里餘、南北殆  
 と三里、人口凡そ百三十萬餘あり、實に大日本帝國の首府にして、  
 英吉利のロンドン、支那の北京等と共に世界大都府の一に數へ  
 らる。市の中央に宮城あり、市街其の周邊を繞り、諸官衙、議院、兵營、  
 府廳、大小の學校、博物館、病院、寺院、公園、工業場等、其の間に散在す。  
 此の地は大道四方に開け、溝渠縱横に通じ、水陸運送の便を極め  
 て、百貨此に輻輳す。鐵道は市の東西南北に在りて、諸方に通じ、其  
 の他馬車鐵道ありて、市の各處に通じ、行人遊客便利を極む。又電



東京

一

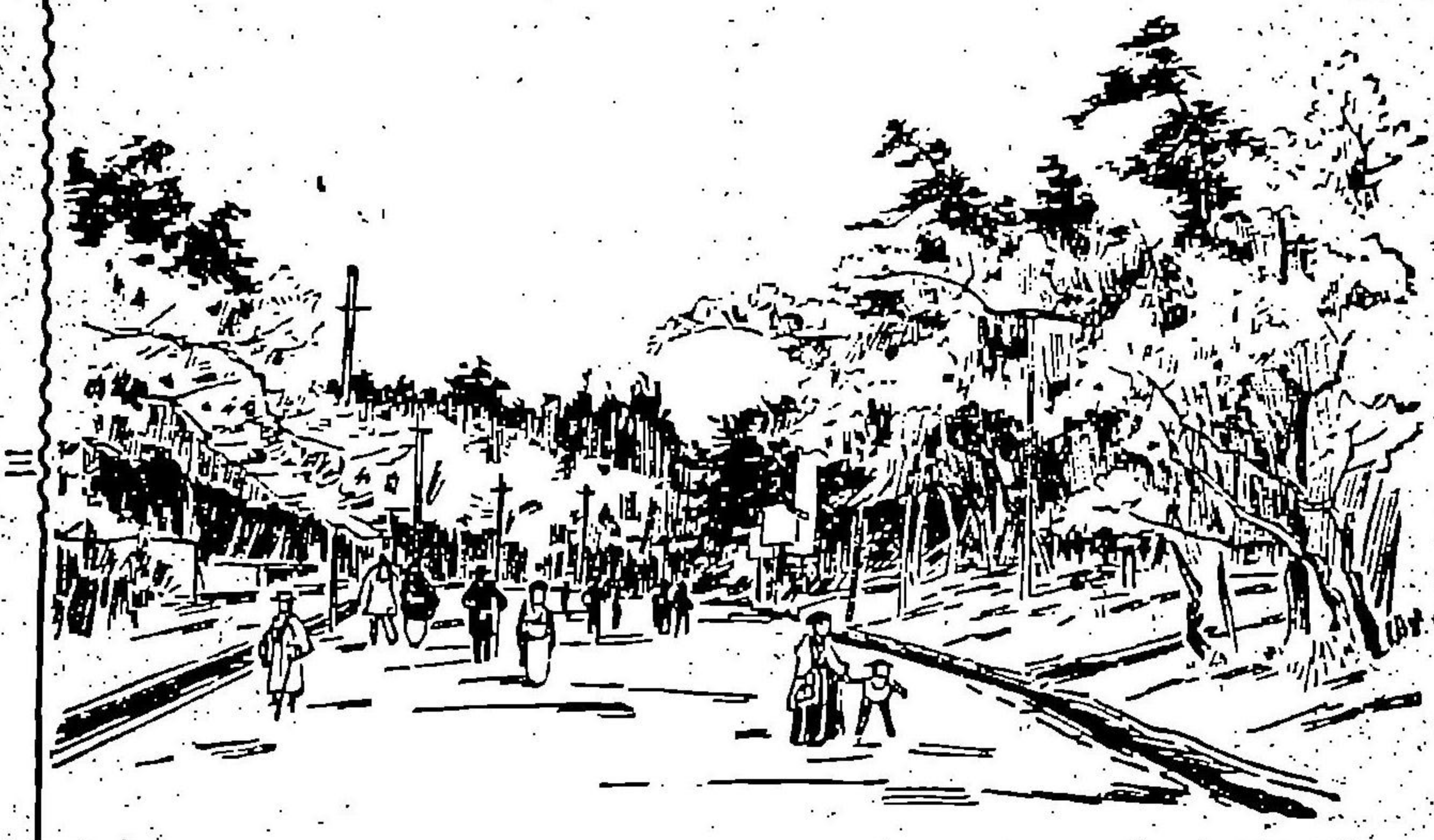




信電話電燈等の諸線縦横に通  
 ずる様は宛も蛛の網の如く石  
 造煉瓦葺造等の高屋大家の立  
 ち連なりたる様はさながら魚  
 鱗を連ね櫛の齒を並べたるが  
 如く往來の群集引さも切らず  
 馬車人力車の音晝夜絶ゆる時  
 なし然れども少しく市街を離  
 るれば上野向島の櫻龜井戸の  
 藤瀧野川の紅葉など風雅の樂  
 み亦少からず

東京は昔江戸と稱して所謂武

藏野の一隅を占め草生茂りて唯  
 民家漁戸の處々に散點するを見  
 るのみなりしが今より大凡四百  
 餘年前上杉氏の臣太田道灌初め  
 て此の地に城を築けり今の本丸  
 は其の跡なりと云ふ後年徳川家  
 康此の地に居城を定めしより代  
 々の將軍常に此に居住し全國の  
 大名亦皆邸宅を此に構へしが明  
 治の初徳川將軍大政を奉還しつ  
 いで今上天皇都を此の地にう  
 つし給ふに及び江戸の名を改め





て東京と命じ給ひさ。

### 靖國神社

東京九段坂の上に靖國神社あり。此の社は初め招魂社と稱し、明治二年六月勅命によりて、戊辰以來の戦死者を祀りたる處なるが、明治十二年に至り改めて靖國神社の號を賜はりたり。それより西南の役に死せし軍人軍屬を合せ祀り、近頃又二十七八年の戦役に斃れたる軍人軍屬をも合せ祀れり。

生さては君の御楯となり

死しては御代の守となる

ああいさまし嗚呼勇まし

威靈は曇らじ千代八千代

いさをは國の光となり

ほまれは民の鏡となる

ああかぐはし嗚呼薫し

美名はくちせじ千代八千代

境内は公園にて周邊廣く、築山泉水、梅桃櫻の林等ありて瀧の音、木木の眺め絶ゆる時なし。神社の正面に故兵部大輔大村益次郎の銅像あり。是は明治の初年に軍務を掌りて、兵制改革の基を立てし人なり。

本社の左に遊就館あり。古今の武器を陳列して諸人に縦覽せしむ。二十七八年の役に分捕りたる武器及び戦死者の遺物なども多く陳列せられたり。されば此の館に入るもの誰かは當時の状況を思ひ起こして、軍人か身を以て國に盡したる赤心の程を感ぜざらんや。



向島

東京の東部を貫きて流るゝは隅田川なり、川の東岸一里許、南は吾妻橋より、北は木母寺に至るまでを向島の堤と云ひて、櫻の名所なり。

吾妻橋を渡りて堤を行くこと數十歩にして、右に三圍牛島の二神社あり、左は川を隔て、待乳山あり、淺草觀音の五重の塔は、遙かに其の西南に立ちて、風景畫くが如し。

今戸の渡は昔在原業平東下の時、此の渡にて嘴と足との赤き鳥の群れ居たるを見て、其の名を船頭に問ひけるに、都鳥と答へけるを聞きて、都人戀しく思出で

名にし負はゞいざ言問はん都鳥

吾が思ふ人はありやなしやと。

とよみし古蹟なりと云ふ。

其より長命寺、白髭社等を過ぎて木母寺に至る、境内碑石多し。此の間、堤の兩側は總べて櫻の大木にして、兩方より枝を交へ、花盛の頃は、恰も錦繡の日覆ひを張れるが如し。花見の人は織るが如く、老幼男女、士農工商、瓢を負ふものあり、團子を買ふものあり、閑靜なる向島、一時雑沓の巷となる、亦一年の好時節なり。

吾が國昔より櫻を以て名高く、而して其の最も名高き處は、皆畿内諸國にありき。今や東西諸國の櫻を比較するに、花瓣の美は互に相下らずと雖も、樹木の全體に至りては、京畿の櫻、概短小にして、東京近國のもの却て長大なり。之を京畿の植木師に問へば、曰はく、櫻に宜しき地は實に箱根以東にあり。是氣候風土の然らしむる所ならんか。



## 日光

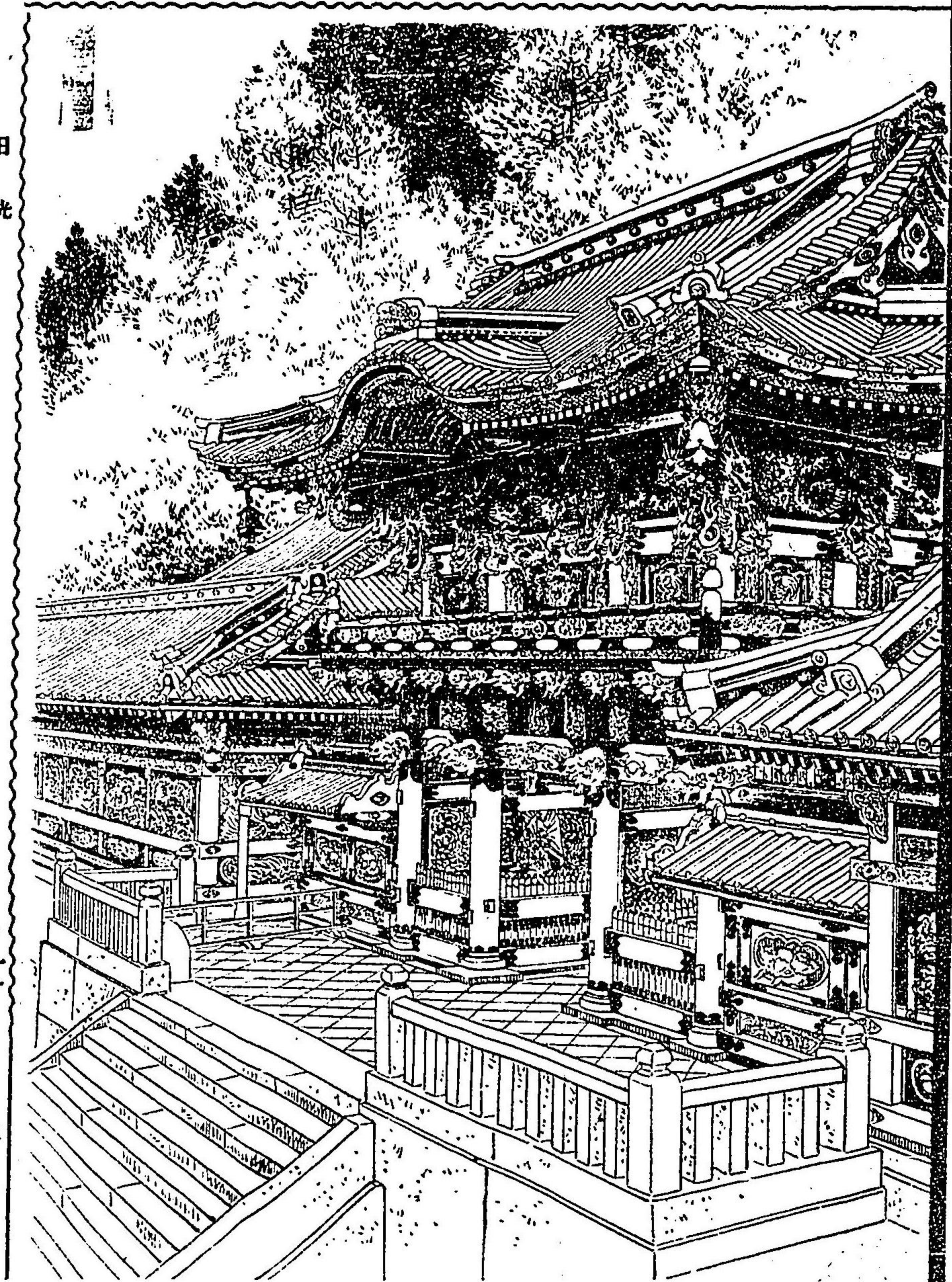
東北鐵道の列車に乗れば、東京より三時間餘にして、下野の宇都宮に至る。宇都宮は栃木縣廳のある所にして、東京を距ること正北三十里許なり。鐵道是より支線を分ちて西北に向ふ。是を日光鐵道となす。日光遊覽の旅客、此の處にて乗替ふれば、一時間餘にして彼の地に達す。

宇都宮より日光に至る街道は、九里餘ありて、之を日光街道と云ふ。途に大澤村あり、是より數里の間、老杉列を成して道を夾み、日光の市街に續く。是昔寛永、慶安の頃、松平右衛門大夫正綱が植ゑし所にして、年を経ること二百餘年、日を蔽ひ雲を凌ぎて並立つこと幾ばくなるを知らず。

日光市街の盡る處に大谷川あり、川の向は即ち日光山にして、東照宮の鎮座する所なり。山の勢深奥雄大、巍然として、功德の高さを表す。眞に東國一二の名山なり。川の中には、大小の奇巖怪石、水を激して沫を噴き珠を走らす。山は嵐の漠々たるを吐き、水は石の磷々たるを含む。とは斯かる景色を云ふなるべし。川に架けたる橋を「神橋」と云ひ、朱塗の欄干、鍍金の擬寶珠、青葉の中に輝き出づ。是日光の結構を見る最初なり。

川を渡れば、老杉森々として、既に深山に入るかと思はる。坂を登れば、一條の大道砥の如くにして、東照宮の正面に至る。石の鳥居は高さ三丈許、柱の直徑三尺に餘れり。表門は總朱塗にして、彫刻に極彩色を施し、左右に鍍金の唐獅子を安置せり。其の兩邊の石垣は高さ一丈三尺にして、石材の鉅大なること驚くに堪へたり。其の一は縦全高を占め、横二丈に餘る。其の名をあはうまると云





表門より數百歩にして陽明門に至る、其の間の敷石は僅に三枚  
 の石より成れり。兩側には、諸大名の獻納及び荷蘭、朝鮮、琉球等の  
 寄贈に係れる金石の燈臺、其他諸種の彫刻品、鑄造品等あり。  
 陽明門は俗に日暮御門と云ふ、蓋し其の丹青の精細巧妙なる、人  
 をして日の傾くを忘れしむるを以てなり。是より内の裝飾は、特  
 に當時の妙手を撰び、畫は狩野探幽、齋守信、同安信、土佐將監、光起  
 等、彫刻は左甚五郎等が手に成れるものなりとぞ。  
 斯くて無數の建築を見つつ、唐門に至る。此の門甚だ大ならずと  
 雖も、木材は唐木にして、彫刻甚だ精細なり。是を過ぐれば拜殿な  
 り。門牆に於て已に賞賛の詞を知らざりき。況や社殿に於てをや。  
 唯看る鳳凰は桐に栖み、獅子は牡丹に戯れ、虎嘯き龍舞ひ、桁梁は



彫紋に丹青を凝らして、恰も綾錦を以て包めるが如く、總金の床板、總金の柱、更に此の世の物とは思はれず、抑吾が國神社佛閣を初め、古今建築の數何ぞ限あらん、壯大なるものあり、堅固なるものあり、優美なるものあり、然れども華美の點に至りては、五畿八道八十州、此の宮殿に及ぶものなし。

社の左より、東照宮の廟、即ち奥の院に至る道あり、其の入口の門には有名なる眠猫の彫刻ありて、左甚五郎が作なりと言傳へたり。是より石階を上ること二百餘級、老樹道を夾みて、晝晦く夏寒し。金碧燦爛たる中より、忽ち轉じて此の處に至り、殊に神威の崇高森嚴なるを覺ゆ。廟は石の玉垣を繞らし、中央に唐銅の大寶塔あり。近古二百五十年の太平を開きし英雄は、此の中に永く眠れり。

東照宮を拜し終りて、二荒山神社を拜す。是往古より此の山に鎮座せし神にして、東照宮の地主神なり。此の山昔は二荒山と稱し、後に之を音讀して、ニク、ワウザンと唱へしを、中古又日光山の字を當てたるなり。

次に靈屋に詣づ。靈屋は、家康公の孫にして東照宮の工事を起し、徳川三代將軍家光公の廟所なり。東照宮に比すれば、美麗及ばざる所ありと雖も、裝飾の風致に至りては、或は彼に過ぐるものあり。

建築の美を見終りたるものは、更に山水の勝を探らんとて、或は駕籠を雇ひ、或は草鞋の紐を結び替へて、山路に向ふ。此の山名勝多しと雖も、最も著名なるを霧降の瀧、裏見の瀧、華嚴の瀧、及び中禪寺の湖とす。霧降の瀧は、高さ二十餘丈、中間一大巖に堰かれて



二條となり、更に亂右に觸れて沫を飛ばすこと烟霧の如し、是其の名を得たる所以なり。裏見の瀧は、高さ十餘丈、突出てたる岩の端より落ち、而して岩の腹に一路を通ぜり、遊人苔を踏み岩を攀ちて、瀧の後に入り、裏面より之を望むべし、故に之を裏見の瀧と云ふ。其の他瀧の大なるもの猶多しと雖も、華嚴に比する時は、皆弟のみ妹のみ。

華嚴の瀧は、中禪寺の湖水の溢れ落つるものにして、大谷川の本源なり。瀧の廣さ一丈、直下すること七十丈、斷崖苔老いて半空に雲霧を吐き、岩燕群り飛びて水煙の間に舞ふ。豪壯とや云はん、奇麗とや云はん、銀河九天より落つと云ふも、未だ其の雄大を表するに足らず、山姫の布を晒すと云ふも、未だ其の秀美を稱するに足らず、詩人歌よみ、相顧みて啞の如し。

華嚴の水源に上ること七八町にして中禪寺に至る、神橋より此に至るまで行程三里なり。此の處今は中宮祠と稱して、亦二荒山の神を祭れり。湖の廣さ一里、長さ三里、黒髮山以下諸山相連なりて之を擁し、山の色、水の光、共に一樣の緑を凝らす、眞に山水明媚の地なり。此の水甚だ清冷にして、昔より魚蟲を生ぜずと云傳へしが、近年魚の繁殖法を行ひてより、鯉、鱒等の美味に乏しからず、亦文明の餘光なり、先年今上巡遊し給ひて、名を幸の湖と賜へり。

日光の遊覽は、通例中禪寺を以て最終とす。然れども足健かにして山行を好む人は、更に進むこと三里にして湯元に至り、温泉に浴す。此の處に湯の湖ありて、是より落つる湯瀧の奇勝は、日光四十八瀧の第一流に算ふ。



或は又險路を犯して、黒髮山に登るものあり。此の山又男體山とも云ふ、本名は二荒山にして、其の頂に二荒山の神を祭れり。山の高さ直立八千二百尺、山路險峻にして、盛夏の外は登拜を禁ず。山上より眺むれば、富士山獨り南方に峙ち、上野の赤城、常陸の筑波等、東國の名山皆眼下に散在し、泰山に登りて天下を小なりとす。の思あり。満山老樹鬱蒼として、石楠花の周圍二三尺なるもの躑躅の大きさ一抱なるもの、各林を成し、其の神秀なること言語の及ぶ所に非ず。

### 松島

松島灣は陸前仙臺の東北に當れり、灣の口東南に向ひ、縦横各百町前後、松島の村は岸の中央に在り。鹽竈は灣の西南の隅に在りて仙臺を距ること四里餘、東北鐵道の停車場あり、松島を遊覽す

る者は大抵此の地より始む。

鹽竈のうしろの岡に鹽竈神社を奉祀せり。石階を登ること二百餘級、正面は左右二宮にして武甕槌神、經津主神を祭る、是上古日本の騷亂を鎮定し給ひし帝室の功臣なり。別宮に鹽土老翁神を祭る相傳ふ鹽土老翁始めて此の地の人民に鹽を煮ることを教へ給へりと。實に此の地は往古鹽を煮るを以て名あり、鹽竈の名は蓋し之に由りて得たるならん。六百年前藤原家隆卿の歌に、

見渡せば霞みの中も霞みけり、

烟たなびく鹽竈の浦。





烟霞の勝景思ひやるべし。

神殿、廊門結構壯麗にして銅鐵の燈籠參差として庭に満てり。無数の老樹境内を繞り、中に有名なる鹽竈櫻あり、柯如青銅根如石と唐人の云ひけるも斯くやと思ふ古木にして、其の花は一種無類の豊富艶麗なることは世の遍く知る所なり。

參拜を終ふれば舟を雇ひて灣内に乗し出だす即ち松島見物なり。浦は山を負ひ、山は灣を抱き、無數の小島其の中に群り立つこと、恰も袖を廣げて兒孫を擁する狀の如し。舟の初めて過ぎるを尾島、籬島と云ふ。舟徐かに進み、島漸く迎ふ、去る者來る者左右應接に違はず。舟子一々其の名を紹介す、皆天然の形容を以て名づけられたり。器具には烏帽子島、鏡島、太鼓島、鼓島、動物には駒島、龜島、犬島、鷹島、神佛の像に象りては夷島、大黒島、辨天、毘沙門、仁王、

地藏島等碁の如く列なり、星の如く並ぶ、世呼びて松島の「八百八島」と云ふ。

島は皆岩山にして島の上には幾百年を経たりけん老松蟠り生ひ、丹壁綠樹波の上に相映ぜり。松は潮風に吹き、矯められて屈曲變化の奇を極め、高き者は鶴の空を翔るが如く、低き者は龜の水を出づるが如く、或は臂を揮ひて人の頭を攫まんとするあり、或は掌を開きて船の腹を撫でんとするあり、行きかふ人はさながら梢の縁を行く心地ぞする。と古人の云ひ置きし言の葉誠に思合はさる。

灣内を一周して松島村の岸に近けば雄島あり、家隆卿の師なる藤原俊成卿が

「立ち歸り又も來て見ん松島や



雄島の苦屋波に荒らすな。

と詠めるは是なり。松島の村には松島寺あり、觀瀾亭あり。松島寺は本名瑞岩寺、一千年前の開基にして伊達中納言政宗の再建せし所なり。觀瀾亭は豊太閤の伏見桃山の茶室なりしを、徳川東照公より政宗に贈りし者なりとぞ。亭に上れば遠近の海山一望の中に集まり、正東一髮の翠は是當國金華山の岬なり。金華山の沖は南方温暖の潮と北方寒冷の潮と相會する處にして、金華山を越ゆれば内地の氣候頓に寒冷なり。山中金色の礫石多く、沙礫皆黄金の光りを帯び、奥州一、二の名勝なり。松島に遊ぶ者往々杖を此の地に曳く。

鎌倉

鎌倉は、源頼朝幕府を置かれしより、足利氏の世の末まで三百年

の間、將軍家又は關東管領の時めさし處なれば、神社佛閣、名所、古跡の多きこと奈良、京都に次ぎての見ものなり。實にや天然の金城湯池とて、三方は山に圍まれ、南の一方打開きて海に臨みたれば、おのづから氣候も宜しく、近頃は暑さ寒さを此の地に避くる者いと多し。是も太平の恵みにこそ。

鎌倉は、相模國鎌倉郡の一郷にして、縦横二里許もあるべし。南面は昔より名高き由井が濱にて西は稻村が崎、東は若江の島の岬を限りとし、三方の山々には所謂七切通しとて山を切通したる道ありて、諸方に出づべし。金澤八景を見るには、朝比奈の切通しより出で、江の島に遊ぶには、極樂寺の切通しを越えて、七里が濱にかゝるなり。

最も名高き鶴岡八幡宮は、鎌倉の中心にして、此より江の島、金澤



藤澤へ各二里なり、宮は南に向ひて立たせ給ひ、大鳥居前の大道は、八幡通りとて直ちに由井が濱に至る。

八幡通りより西の方なる名所舊跡の著しき者を云はば、まづ大佛なるべし。此は聖武天皇の建てさせ給ひし、關東總國分寺の跡にして、今の太佛は頼朝の建立なるが、寺は早く津浪によりて失せにしかば、五丈の銅佛は、空しく古き礎の間に立ち給へり。

是に次ぎては長谷の觀音大士、こは大和の初瀬のと同木同作なりと云ふ。其の外は北條時頼の建てられたる建長寺、同時宗の圓覺寺、後醍醐天皇の御爲めに北條氏を圖りて殺され給ひし、贈正二位日野俊基卿の葛原岡神社などなり。

八幡通りの東には、大塔宮の籠居し給ひし御跡なる鎌倉神社、荏柄の天神など、貴く神さび給へり、頼朝の墓、屋敷跡、或は北條、足利

の家の跡などの、或は鋤かれて畠となり、或は草深く鳥悲しむを見れば、昔の盛んなりし時を思ひやりて、哀れも淺からず。

其の外、名所舊跡數ふるに違あらず、又鎌倉將軍の頃の名工なる運慶、湛慶の作と云ふ彫像、こゝかしこに多し。名物は鎌倉海老の名、廣く東海の産に及び、又昔鎌倉時代に彫刻、漆器の盛んなりしなごりとして、鎌倉彫りと名づくる漆器を製する者あり。

### 富士山に登る記

一年盛夏の頃なりき、富士登山を思ひ立ち、白帷子を纏ひ、菅笠を戴き、脚絆草鞋の旅装かひしく、都の宿を朝の霞と共に立ち出でて、先づ流車に乗り、晝頃御殿場の驛に著きぬ。茲は箱根の山の北に在りて、富士の裾野の一小市なり。仰ぎ見れば、富士の嶺は高く雲に聳えたり。



此より三里が程、裾野の草を分けて、須走の驛に至るの間、葉末の戦ぐを見て、微風の度るを知り、雲雀の聲、笠を掠めて遂に其の形を見ず、夏の盛の頃なるに、此は海面を抜くこと高ければにや、猶晩春麥畑の間を行く心地す。知らず識らざる間に、足の爪さき漸く仰ぎて、須走の驛に著さぬれば、今過ぎ來し道は一々指點し得べき程なりき。

日脚尙高けれど、今日は英氣を養ひて明日登山せばやとて、此に宿りぬ。夜に入りて、徒然の餘、旅宿の主人を招きて、種々の物語りす。主人云ふよう、富士登山の道四つありて、須走よりするを東口と云ひ、須山よりするを南口と云ひ、大宮よりするを表口と云ふ。何れも駿河に面する處に在り。北口は、甲斐の吉田より登る道なり。毎年太陰曆六月朔日に山を開き、同じき七月二十六日に山を

閉づ。此の間は登山の時節にして、其の前後は山に登ることを得ずと。登くる日一僕を傭ふ、荷物を擔ぎ案内せしめんが爲めなり。強健の者に非ざれば物の用に立たず。さればにや、此には之を強力と呼べり。登山の客には、宿より布子を貸し、餅と辨當とを供するを常例とす。強力はあらゆる荷物を結束して脊に負ひ、共に宿を立出づ。驛の出口に淺間の社あり、伏し拜みて裾野にかゝりぬ。強力云ふ、登山の口々には皆淺間の御社を分祀せり。と。此の邊は、徑を夾める樹木大いなる者なし。されど鳥聲禽語相聞えて、尋常の山路に異ならず。路亦甚だ平らかにして、馬背能く人を載せて行く。社頭より二里許行きて茶店あり。是より路漸く險しく、復馬を通せず。故に馬返しの茶屋と云ふ。又深林を穿ちて登るに、忽ち見る



幅二三町許が程、山の崩れ落ちたらんよーにて、其の長さ幾何と云ふことを知らず。強力ちからの云ふよー、春暖漸く催もよほす頃ほひに至れば、積雪せきせつの底先づ解け初め、加ふるに麓ふもとの方解くること早さが爲めに、上層かみの積雪、支へを失ひてなだれかゝり、其の勢止むべくもあらず。其の猛烈まげつなること譬たとふるに物なく、大石を抱き去り、大樹を根こぎにし、其の過ぎ去りたる跡には一物をも遺のこさず。此の氷流ひりゅうを此にて雪城ゆきしろと云ふ。と。世界の高山には、斯かる地變のありとは聞けど、まのあたり見しは、此の時を始とす。氷流の涯きりとも覺しき處には、巨巖きよがん砕け、大木摧くだけたる跡遺りて、坐まに毛髪けを豎たたしむ。馬返しより登ること一里にして、小御嶽こみづたけの社あり、此にて金剛杖こんがうじょうを買ふ。金剛杖は檜ひのきにて作り、八角に削り成し、本太く末細く。長さ八尺もあらんずらん、富士東口登山の七字を焼印やういんせり。又少し登

りて茶店あり、晝食場ひるけしやうと云ふ。ここにて辨當べんたうを開きて晝食す。是より少し登れば、眼界開豁かいかくにして、復草木の衣被いひすることなく、山骨やまほね全く暴露ばうろし、滿目まんもく悉く焦土せうどにして、土壤どおやう赭色せきしきを帯ぶ。即ち火漿かじょうの積成せきせいする處なるを知るべし。

是より頂上ていじやうに至るまで、七八町乃至十町を隔へだてて石室いしむろあり。以て登山とんざんの客の休憩きゅうけい宿泊しゆぱくに便べんす。每室まいしつの距離きょりを一合いっごうと云ひ、室の數合すうごうはせて九つあり。其の距離相遠きょりあひだるき者は、中間ちゆうかんに小室せうしつを置き、之を五勾ごこう目の岩室いわむろと云ふ。一合を呼びて一里となすは、蓋かたし一合いっごうを登る勞らうは、平地一里を歩行ほこうする勞らうに當たるを以てなり。強力ちから戒いさめて曰いはく、歩歩力を著つけ、眼めを遊あそばしむることなかれ、然せずば山に酔よはん。と。蓋し山に酔ふとは、瞑眩めいけん昏倒こんたうするを云ふなり。途中とちゆう徑路けいろうの認みむべき者なく、強力ちからの導みちくまゝに攀たづち登り堅かたく其の戒いさを守り



て、眼を放つことなく、室に逢ふ毎に必ず憩ふ。登り登りて、六合目を經て七合目に至る間、路尤も險阻なり。杖を捨てて腹はひ登る。加ふるに呼吸漸く急促を覺え、一步一喘汗津々として出づ。然れども足を止むれば、冷氣骨にしむを覺え。八合目に至れば暮靄群山を埋め、唯峰頂に夕陽を見るのみ。此の時、岳影投射して海濱に達すべし。古人の歌に、

富士うつす田子の浦わの夕なぎに、

舟漕ぎよする山の上まで。

暫くありて日落ち、夜色全景を没したれば、今宵を此に過ぎさんとて、石室に入り、行李を卸して布子を取て、爐を圍みて煖を取る。石室は巖の隈に立てり。巨材を以て組立て、大石を並べて屋根とし、四面亦圍むに石垣を以てし、前面に門を穿つ。さながら木骨

石皮の洞窟なり。屋の高さ立ちて歩するに足るべく、廣さ小なる者は二十人を容るべく、大なる者は百人を宿するに足る。室内床を架せず、板を敷き筵を展ぶるのみ。室の中央に爐あり、晝夜枯木を焚きて煖を取る。蓋し此の邊、山頂に近きが故に、盛夏と雖も、華氏四十度に上らず、布子も寒を防ぐに足らざるなり。加之空氣稀薄の度、漸く甚だしく、薪を焚くに善く燃えず、米を炊くに善く熟せず。供する所の米飯、恰も蠟を嚼むが如し。是餅を齎し來るの必要ある所以なり。室内又大桶を並べ置き、雨水を漑へて飲料となす。若し雨少きときは、雪を煮て用を充たすと云ふ。

翌くる日、日の出を見んとて、朝早く起き出づれば、下界猶暗黒なるに、東方已に白み渡れり。暫くして、白き者淡紅となり、深紅となり、次いで光線迸射し、群山の額に映じて、睡眠を呼び醒すが如し。



已にして金門開け、紅日暉々として、東海より湧くが如く、水面忽ち紅波を漲らし、水を離れんとして離れず、即くが如くにして即かず、其の光景言語に絶す。太陽全く水を離れて、其の形漸く小に天地全く明かなり。

是より又頂上に向ひて登る。一合目より此に至るまで、焦土の中、岩の小蔭に、間愛すべき花を開く。蓋し無名の草なり。又唐松の族、風に虐げられ、雪に壓されて、成長すること能はず、纒に根を岩石に託して存するものあり。其の根幹節くれ立ちて、多くの年月を経たらんと見ゆるも、其の高さ尺に満つる者なし。又鳥獸の族、一も見る處なし、唯岩燕と稱する者の稀に飛びかふを見るのみ。登りて九合目に近づかんとする頃ほひ、伊豆の天城山の方に當りて、白雲の立升るよと見えしが、忽ちの間に、風は雲を送り來り、

岳に觸れて大風雨となり、面を打つこと礫の如く、笠飛び簑蹴り、風の爲めに捲き去られんとすること屢にして、僅に九合目の室に逃げ入りぬ。是に至りては、空氣愈稀薄にして、呼吸益促迫し、面色土の如く、唇の色變じて紫白となり、目眩し、耳聾し、殆ど人間界に非ざるかと疑ふ。暫しが程は、雨愈降りしきり、風愈吹きさすび、石室も爲めに動けり。已にして雨止み風死し、雲破れて日出づ。下界は白雲重疊し、雷聲鞋の下に響き、日光白雲を射て、眼界悉く綿を布くが如し、亦奇絶の景なり。再び勇を鼓して頂上に達す。頂上には噴火口の跡ありて、萬古の雪を湛へ、其の深さを知らず。其の周邊凡そ五十町環らすに、八嶺を以てす。劍峰と稱する者、最も高峻なり。其他大日岳と云ひ、釋迦岳と云ひ、駒岳と云ふ者、環立して噴火口を護するに似たり。噴火口の周邊を一周するを御



八廻と云ふ。其の危険言ふべからず。或は牛の背を歩するが如き處あり。或は塔の屋根を攀づるが如き處あり。加ふるに噴火口より吹き出す風、忽然として起り、忽然として止む。不意に風の搏つ所となりて、一旦脚を失すれば、萬も生理なし。劍峰の下、噴火口の南に一泉あり、銀水と云ふ。東北に又一泉あり、金水と云ふ。手に掬びて之を飲めば、清涼肺腑に透る。此の二泉四時凍らず、汲みて涸れずと云ふ。

劍峰の下南方に面する處に、富士神社あり。社頭に立ちて目を放てば、彼の箱根、足柄、愛鷹など、平地に在りて高峰と呼び大山と喚ぶ者も、天上より見下ろしては、殆ど其の山容を認むること能はず。恰も平面地圖に畫く所の山の如し。蘆湖、富士沼、山中湖、川口湖は、盆水の如く、諸山の間を曲折する。諸川は、細きこと線の如く、其

の間に點綴せる市街村落は、唯黒點の斑々たるを認むるのみ。獨り東海の水は、汪洋として碧を凝らし、白線一道を以て陸地と界を成す者は、小綾、洵の濱、田子の浦に、白波の頽るゝなり。

倏忽の間に、白雲又起り、見る見る八方に瀰漫し、悲風黯澹として、久しく止まるべからず。乃ち山を下らんとて、吉田道を取る。凡そ下山の道は沙路にして、金剛杖に支へられて走り下る。其の疾さ、こと飛鳥の如し。一旦歩を進むれば、復止まる處を知らず。須臾にして五合目に達す。是より樹木繁茂し、山徑極めて崎嶇たり。馬返しを経て、裾野に至り、顧みれば、山容端然として、夕陽に映じ、全山悉く紫なり。已にして日入り、月出づ。馬返しより三里の間、平遠なる草野をたどりて、吉田淺間の社に出づ。結構雄壯なりと雖も、稍廢頽に就き、塔砌の間、草生ひ蟲鳴き、月光老杉を漏れて、靜に殿廡



の間を照らし、人をして「雲樹森々碧殿寒」の句を想ひ起さしむ。八時吉田驛に投宿す。

### 八景

支那に洞庭湖とて、名高き湖水あり。其の周圍には多くの名所ありて、風景甚た好し。就中古より人口に膾炙せるは瀟湘八景にして、所謂瀟湘の夜雨、江天の暮雪、洞庭の秋月、遠寺の晚鐘、平沙の落雁、遠浦の歸帆、山市の晴嵐、漁村の夕照是なり。

我が國好事の人之に倣ひて、琵琶湖邊の名勝に近江八景の名を命ぜり。即ち唐崎の夜雨、比良の暮雪、石山の秋月、三井の晚鐘、堅田の落雁、矢橋の歸帆、粟津の晴嵐、勢多の夕照是なり。

京都を遊覽する人は皆、道を此に枉げて、或は杖を湖邊に曳き、或は船を湖心に浮ぶ。汽車に乗りて急ぎ過ぐるも、勢多の長橋は宇

治川鐵橋の南に隣り、比良の高根は湖水を隔てて遠く西北に峙ち、其の他三井寺の壁の白と見ゆるなど、恰も畫の中を過ぐる心地ぞする。

諸國又到る處八景の撰びあり。京都の東山八景及び播磨八景は、已に琴歌に詠ぜられ、東國には、武藏の金澤八景、下野の日光八景等最も有名なり。されば僻地寒村に至りても、風流好事の人は、丘陵田園の眺望を見立てて、八景の名を負はしめ、或は之が景色を畫き、或は之を詩歌に詠じ、神社佛閣に掲ぐる者、往々あり。諸子散歩の序に、近傍の風景を見立て、其の地の





八景を撰びて、相共に品評せんは、亦心を樂しましむるの一事なるべし。今近江八景を以て唱歌の例を示さん。

松が唐崎時雨るれば、

雪になりゆく比良の山。

粟津はいつか晴れそめて、

矢橋に歸る眞帆片帆。

勢多の夕榮、三井の鍾。

石山寺の宵月は

堅田に落つる雁がねの

數さへ見よと照すなり。

京都

京都は、昔桓武天皇の皇居を定め給ひしより、千百餘年の間の帝都たり。明治の初め、東京を帝都と定め給ひしかど、京都は、猶三府の一に居りて、其の繁華なること、東京大阪に次げり。

京都は、山城の國の中央にありて、其の地勢おほむね平坦なり。古は京都を二區に分ちて、東を左京、西を右京と云ひき。今の京都は大凡昔の左京なり。

皇居は、市の東北にあり、其の周圍に松の植込みありて、景色優美なり。市街の最も繁華なるは、三條通、四條通、寺町通等にして、商店軒を並べ、往來の人、前後相接す。

近郊には、東山もよりに祇園、清水、銀閣寺等あり、西に大堰川、嵐山の勝地あり、北には北野社、金閣寺等あり、其の他神社、佛閣、名所、舊蹟、數ふるに暇あらず。



三六  
京都は、東西北の三面皆山にして、交通の不便少からず、且河流淺くして、運輸の自由ならざるが故に、商業振はざれど、製造の業は、古來盛んにして且巧みなり。殊に近來は、益市の繁盛を致さんが爲め、疏水の大工事を起し、近江の湖水を引入れて、通船の便を與へ、又諸工場に原動力を給したれば、將來は、商業漸く開け工業愈繁盛なるに至るべし。

京都の製造品中、最も精巧なるは、西陣の各種織物にして、中には他國の模擬する能はざるものあり、且京染とて、染術の巧みなること全國第一と稱す、友禪染、加茂川染等は、其の著しきものなり。

### 金閣

南北朝和睦とのひで朝廷一つになりし後は、天下一先づ無事なりしかば、將軍足利義滿は心漸く驕りて、奢侈を極めたり。有名



なる京都北山の金閣は、此の頃義滿が造りたるものなり。閣は三層にて、天井板壁、勾欄等皆金を塗りたり。今は總て剝げ落ちたれども、猶處々に其の跡を留めたり。庭園も亦勝れて佳麗なり。池の形の趣尤も妙をさはめたるに、長松奇石相交りて更に一層の風致を添ふ。されば、我が國庭園の作り方は今日と雖も、大抵之を手本とす。閣の後へに亭あり。中に南天の



床柱、萩にて編みたる違棚等あり。何れも珍しきものなり。此の亭は將軍、點茶の處なりきとぞ。

### 京都の櫻

昔より京都は花の名所にして、京都といへば花を思出で、花といへば京都を思出づる程なれば、花の都とはげに好き名にぞある。京都にても殊に名高くして、世にもてはやさるるは祇園、御室、及び嵐山の櫻なり。

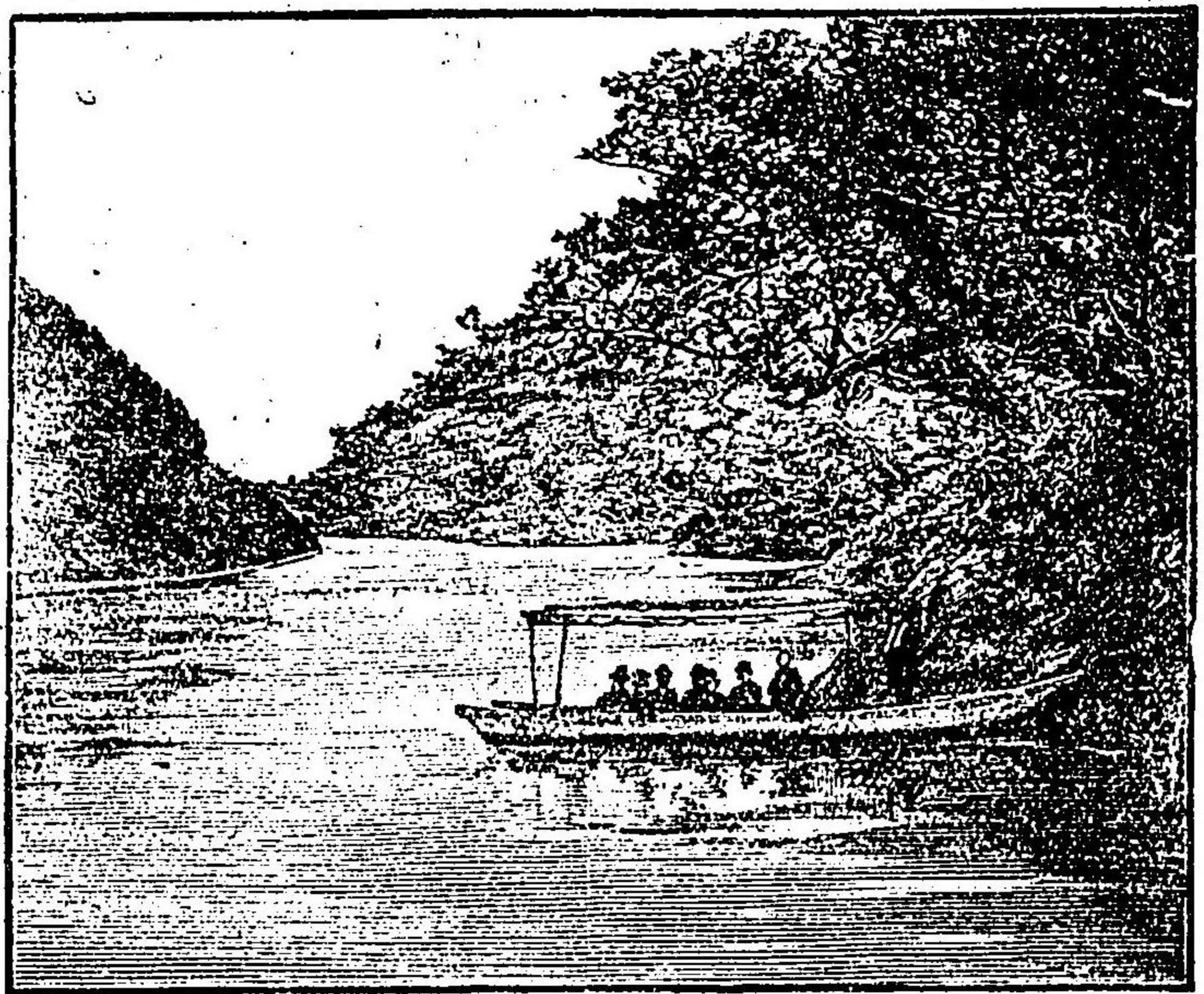
祇園は東山の麓にありて名高き祇園の社の在る處なり。社の正しき名は八阪神社といひ、官幣中社にして、素戔鳴尊、姫、神奇、稻田媛命及び八王子を合せ祭るといふ。境内甚だ廣くして、神殿、樓門等の結構、壯麗を極めたり。

神社の近傍すべて櫻多しと雖も、取り分けて祇園の櫻と稱せら

るは、社の東方智恩院に至らんとする道の角に植ゑられたるしだれ櫻にして、幹太く、無数の枝は遠く四方にさし出で、一株の木にしてさながら一の櫻林を成せり。其の花は早咲きにして京都の櫻の魁なれば、珍しきを好む都人は我れ先にと花見に出掛け、花盛りの賑はしさ得も言はれず。夜に至れば、ここかしこの燈火光りを競ふ中に、わけて此の櫻の本には篝火高く焚きて、花神の眠りをおどろかし、紅雲、紅燈相映じて、恰も紅錦帳裏に在るか如し、遊人手を携へ、三三五五群をなして、夜色を賞するは正に是「寒からず暖かならず花ある處、半ばは酔ひ半ばは醒む無事の人」といへる詩にも似たり。所謂祇園の夜櫻とは是なり。

嵐山は山城、丹波を界する山脈、續きにして大堰川の上に臨めり。山は甚だ高からず、いとなつかしき程にて、樹木鬱蒼たる中より





といふ。此の邊より川を隔てて花を見る景色いとよし。三軒屋と

櫻花の爛熳とこぼれ出でたる  
は花の色も一しほ見榮ありて  
千里鶯啼て緑紅に映ずといふ  
唐詩も思出でつべし。昔龜山上  
皇の吉野の花を此の山に移し  
植ゑ給ひしといふは誠にやあ  
らん。大堰川に渡せる橋を渡月  
橋といひ、又御幸橋といふ。此の  
川は昔より屢御幸ありて詩歌  
管絃の船を浮べ給ひし處なり。  
川のこなたに茶屋あり三軒屋

いふは元此の邊に家の少かりし故の名なるべきに、今は貴人紳  
士の別荘など漸く多くなりぬ。花盛りの頃は花見の人も出盛り  
て川ばたの往來は肩摩れ合ひ、額突合ふばかりなれど、さすが京  
都の人のおとなしさは東京の向島の如く百眼千鳥足を見るこ  
と多からず。

川ばたの雑沓を厭ふ人は舟を浮べて大堰川を上る。上るに隨ひ  
て兩岸の勢漸く險しく、水の色は藍を溶したるやうに青く、大な  
る岩のここかしこに顯れて龜の甲を干すが如きもあり、切岸だ  
ちて今にも落ちかよらん勢をなせるもあり。千鳥が淵戸無瀬の  
瀧などいふ名所ありて、瀧の上には名高き淺黄櫻あり、温泉とい  
ふ處は炭酸泉の温泉場の上り口にして、是より數町山を上れば  
大悲閣とて觀音堂あり、閣の前には此の川を切開きたる偉人角



倉了以の碑あり。

温泉より上流は即ち保津川の急流にして、數人の人夫を雇ひて舟を曳かしむるに非れば上ることを得ず。故に保津川の絶景を探らんと欲する者は先づ京都鐵道にて丹波の龜岡に出で、それより舟を雇ひて此の川を下るべし。奇石怪岩河流に起伏して、瀨を成し、瀧を成し、水を嚙み、珠を跳らす。舟子は竿を携へて舳先に立ち、右に避け、左に譲りて巧みに舟を下す。其の熟練驚くに堪へたり。

然れども保津川の舟遊びは初夏新緑の時を最も宜しとす。此の頃は兩岸の杜鵑花正に盛りにして、恰も燃ゆるが如く、猿の人を見て叫ぶさへ珍しく面白し。兩岸の猿聲啼き住まざるに、輕舟は已に過ぐ萬重の山とは斯かる處をいふにやあらん。此の遊びは

京都の花見の中に最も幽靜閑雅なるものなり。

次には御室なり。御室とは仁和寺のことにして、京都市の西南一里餘り、嵯峨もよりに在り。此の寺は眞言宗の名刹にして、今より一千餘年前光孝天皇の仁和四年の開基なり。宇多天皇御落髮の後、當寺に入りて宮殿を造營し給ひしによりて御室とは言ひ來りしなり。其の後朱雀院も亦ここにましまししより以來、明治の御代となるまでは代代法親王の住し給ふ所なりき。維新戰爭の時仁和寺の宮と申しし今の小松大將の宮こそは其の最後の貫首におはすなれ。されば寺格なども殊に高くして、今の本堂は紫宸殿の古き建物を賜はりて移し建てたるなりといふ。

此の寺境内廣く、殿舎僧坊數多ありて其の間悉く櫻を植ゑたり。此の寺の櫻の他に異なる所は、幾年月を経ても木の延びざるこ



とにて、枝幹蟠りて地を這ふが如く、木々皆根元より花を着けて  
恰も錦の茵を敷くが如く、遠く望めば紅雪の庭を埋むるに似た  
り。其の花は大抵八重の遅咲にして京都の櫻の殿なれば、遊人春  
を惜みて來り集まる者亦少からず。

祇園、嵐山、御室に次ぎて名高きは平野の夜櫻なるべし。平野は北  
野に近き處にして、平野神社には日本武尊、仲哀天皇、仁徳天皇等  
を祭り奉れり。此の境内にも昔より櫻多かりしかど、近き頃の祠  
官何がしかやいふ人、櫻に委しき人にて名木を多く集め植ゑ  
たりといふ。されば木名には一々札を立てて名を記せるさま稍  
異様の心地すれど、集めし人の丹精を思へば、さもあるべし。花の  
間には茶店、酒舗の假小屋列を成し、夜に入れば篝火を焚き連ね  
て、遊客の多からんことを競へり。或人評して、御室は花、人を埋め、

平野は人花を埋むといへりとかや、其の繁華思ひやるべし。

此の外、智恩院、西大谷、永觀堂、若王寺等或は櫻の名所として、或は  
花紅葉を兼ねたる場處として遊賞せらるる處數を知らず。實に  
京都は歩々櫻を生じ、到る處に春の綺羅を飾れり。古歌に、

見渡せば、柳櫻をこきまぜて

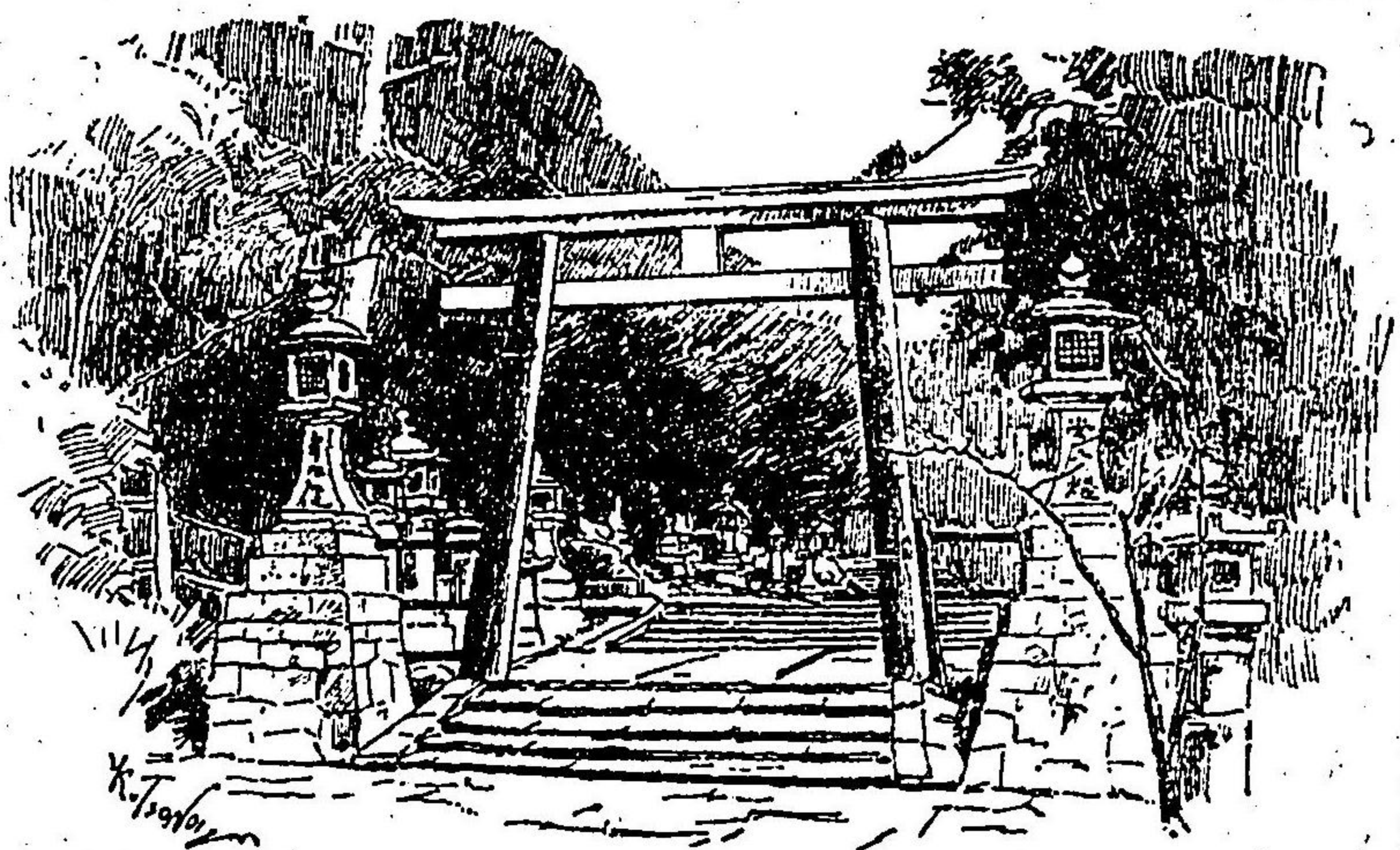
都ぞ春の錦なりける

といひ、又宋詩に「直ちに宮錦を將て宮城を裹む」といへるも過大  
の言には非るなり。

### 奈良

奈良はまた南都ともいふ、京都の南に在りて古への帝都なるが  
故なり。今の奈良市街は舊都の東隅の一部にして、市坊二百餘人  
口三萬餘あり。市街の東は連山屏風の如く、春日山、若草山、手向山





等の名山立並びたり。  
 春日山本名は御蓋山にして、春日大社其の麓に鎮座せり。祭神は天孫降臨の時の元勳なる天兒屋根命、武御雷命、經津主命等なり。境内廣潤深奥にして無数の老樹鬱蒼として雲を凌ぎ、社殿廻廊樓門の丹聖は深緑と相映じて一層の色を増せり。境内に飼へる神鹿は悠悠として遊び戯れ、人に馴れて食を求む。廻廊に懸かる金燈籠、道を夾める石燈籠、列を成して其の數を知り難し、或人嘗て之

を數へたるに金屬製のもの大凡一千、石造のもの大凡二千なり。さといふ、毎年大祭及び節分の夜には、盡く此の燈籠に點火す、實に稀有の壯觀なり。

若草山は俗に三笠山といふ、然れども眞の『みかさやま』は上に云へる春日山のことなり。春日山は樹木森森として深緑の色犯すべからざる威嚴あり。若草山其の傍に立ち、滿山悉く新草にして淺緑の毛氈を敷けるが如く、優美にして親しむべし。愛すべし。毎年度此の山を焼きて枯草を去り、若草の生ずるを促す。されば春日蕨を生ずること甚だ多く、滿都の士女瓢を負ひ、辨當を携へて蕨折りに行く、亦年中の一大樂事なり。  
 若草山の鄰を手向山といふ、手向山神社は八幡宮にして境内紅葉多し、菅公嘗て行幸に供奉してここに遊び

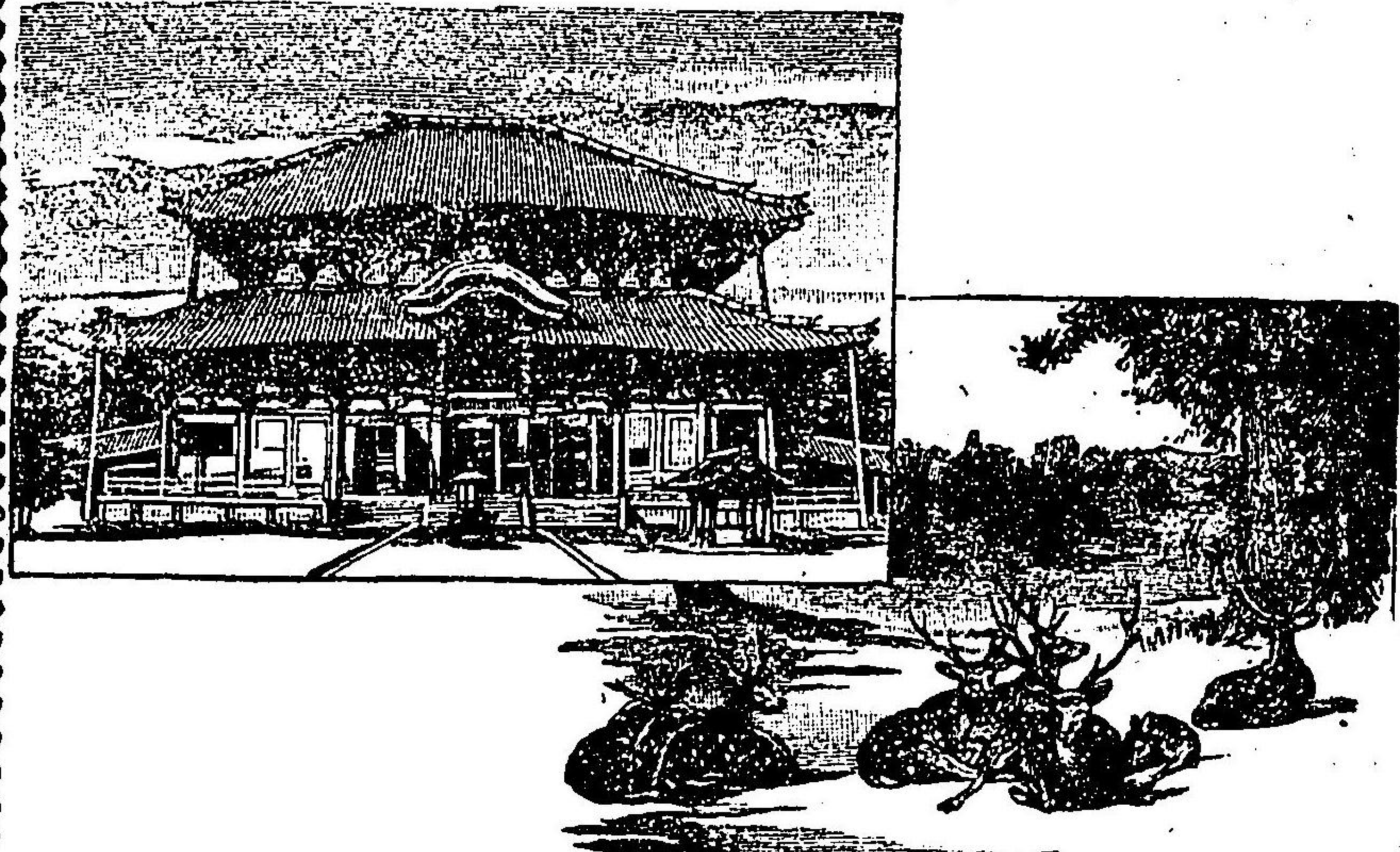


此のたびは幣帛も取りあへず手向山

紅葉のにしき、神の隨意

とよみ給へり。昔は旅行する人錦を切りて沿道の神神に手向くる例なれど、行幸の供奉に忙しくして用意に違あらざりし故、紅葉の錦を神の隨意に取らせ給へとの心なるべし。

手向山を下れば、東大寺あり。東大寺は聖武天皇の御建立にして其の本尊は有名なる奈良の大佛なり。大佛は廬舎那佛の坐像にして其の丈け五丈三尺五寸あり。平氏の世に平重衡當寺を焼討して殿堂灰燼となり、大佛の頭部鎔解したり。其の後頼朝之を再興しけるに、戦國の世に更に松永久秀に焼かれて大佛の頭部又損ぜしを、山田道安といふもの之を修覆しけれど、佛殿の再興に至らずして久しく露佛にてありき。徳川時代に至り、貞享元祿年



中、當寺の公慶上人勅許を得て天下に勸進し、遂に今の大佛堂を建てしかど、近年大破に及び、今正に修繕中なり。然れども奈良の朝の建築と稱せらるる南大門のみは二度の兵火を逃れ、千年の風雨を凌ぎて、其の莊嚴を失はず、古への建築の堅牢鄭重なるを示せり。

大佛殿の中は中央に佛壇ありて大佛を安置し、其の周圍には大和地方の古物を陳列して參詣の諸人に縦覽せしむ。慈悲秀麗なる菩薩の像、武



く勇める神將の像、物すごく恐ろしき明王の像、弘法大師の書ける船若寺の額、大塔宮の敵を避けて隠れ給ひし唐櫃、楠正行が鏝にて歌を鏝り付けたる如意輪堂の扉など、珍しき物、面白きもの、感深きものいと多し、又當寺の境内にある正倉院といふ一棟は、勅封の御庫にして、聖武天皇の御遺物等を納められ、世界有数の古寶藏なり。

其より市中の方に歩を進むれば、藤原氏の氏寺として藤原時代に時めさし興福寺あり、其の下に猿澤の池あり、此の邊亦名所多くして一一記すに違あらず。

是等は現今の奈良町の部分にして、前にも云へる如く、舊都の東隅の一部に過ぎず、舊都の西部は今は田島村落に變じ、人をして「桑田變じて海となる」の語に感ぜしむ。是等の村落は總稱して今

猶「西の京」と呼ぶ。

西の京には西大寺薬師寺等奈良時代の古寺多く存せり。薬師寺の本尊薬師如来、及び其の兩傍に侍せる日光菩薩、月光菩薩は世に稀なる名作にして、或る西洋人は之を見て世界第一の銅像なりといへり。

奈良より大阪に趣く鐵道に法隆寺停車場あり、法隆寺村の法隆寺は聖德太子の開基にして、其の時以來の建築及び寶物最もよく保存せられたり。奈良を遊覽する者は必一たび此の地を訪ひて、寒村古驛の中に巍然たる堂塔の存するを見るべし。

### 吉野山

吉野山は大和の國吉野郡にありて、櫻の名所なり。麓より山奥まで、峯にも尾にも、櫻の樹數限りなくある故、四月の中頃に至れば



滿山花に埋れて白雲の如く、其の眺めの美しき言葉にもものべ難く、畫にも寫し難し。

みよし野は花をつくねて何もなし

此の山は斯く櫻花を以て名高きのみならず、吉水院、如意輪堂等南朝四代五十餘年の遺跡の存するもの多ければ、花の頃は勿論之を尋ね訪ふもの常に絶ゆることなし。

吉水院は後醍醐天皇の暫く行宮となし給ひし處、如意輪堂は楠木正行が梓弓の歌を扉に書き遺しし處、藏王堂は村上義光が護良親王に代りて自害せし處、又花櫓は佐藤忠信が源義經の爲めに防戦せし處なり。其の外、後醍醐天皇の御製に見えたる雲井の櫻、豊臣秀吉の花見の舊跡なる長峰の櫻など、世に聞えたるもの少からず。

## 大阪

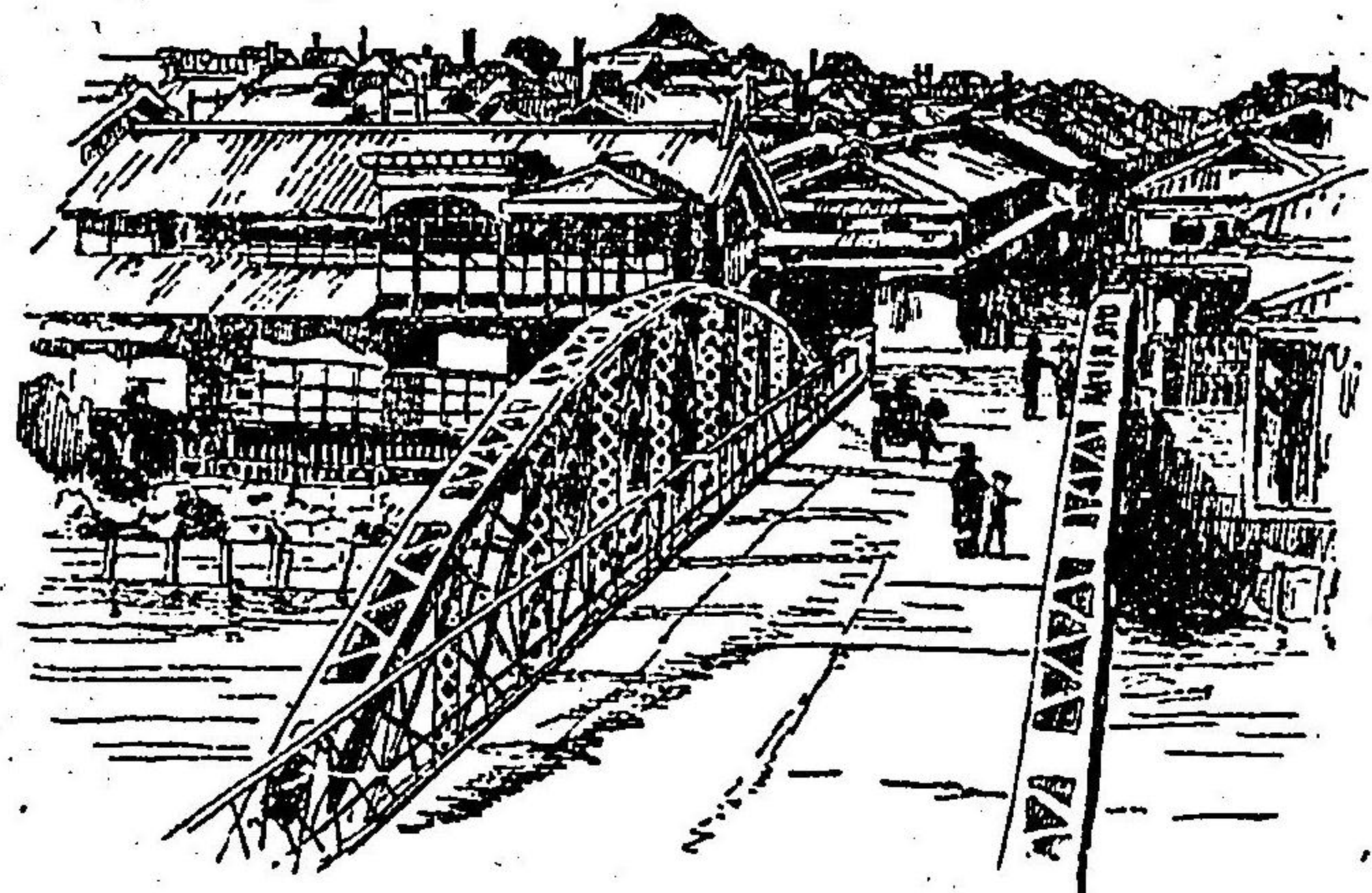
吾が國の都邑中、歴史に關係著しき者を數へば、大阪は第一流に位すべし。まづ古來仁君の例に引き奉る仁徳天皇は此の地に都し給ひ、古今第一の英雄豊太閤は此の地に城けり。その他神武天皇東征の御上陸の地も此の邊なるべく、大化の大改革を行ひ給ひし孝徳天皇の長柄の豊崎宮の跡も大阪市に接せり。明治維新の時、大久保利通が奏議により、「聖明の鴻基」を開かん爲め、京都を出でて先づ蹕を留め給ひし處も亦大阪なり。

大阪は歴史上第一流の地なると共に我が國第一の商業地なり。此の地淀川を帯び、大阪灣に臨み、面積三方里、人口八十二萬ありて全國中最も稠密の地なり。

淀川は市の北部を流れ、分れて安治川、木津川となり、市の西部を



貫き海に注ぐ。無数の溝渠是等の河川より縦横に市内を通過して運漕に便す。安治川の落口は即ち大阪港なり。港口風波荒く、且淀川の泥沙流れ積みて大船を入るに便ならざりしも、猶出船千艘、入船千艘の繁昌を極めしに、況や近年築港工事を起こしたれば、他日落成の曉には内外の大船巨舶競ひてここに集るに至るべし。



淀川が始めて市内に入る處の岸に造幣局あり、對岸に櫻の宮あり。造幣局は言ふまでもなく貨幣を鑄る役所にして、構内多く櫻を植ゑ、花盛りの時には

開放して諸人に花見を許す。櫻の宮は皇太神宮を祭りたる社なり、一むらの老松社殿を擁し、淀川の堤上數町の間には數千株の櫻枝を交へ、造幣局の花と川を隔てて相映ず。滿都の士女花に酔ひ花に狂ふさま恰も東京の向島に似たり。此の邊は市街を離れて土地廣く、而も河の運漕便利なれば紡績其の他の工場多し。是より少しく下れば、市街川を夾み、中に天滿橋、天神橋、難波橋等の諸大鐵橋相並びて架かれるは「雨ふらざるに何の虹ぞ」とも云ひつべし。難波橋より下に大なる島あり、之を中の島といふ。島の首に公園地あり、園を開きてより年未だ久しからざれど、綠樹已に陰を成し、大噴水は數丈の高さに舞ひ、颯颯滔滔として夏猶寒し。園中に豊國神社ありて豊太閤を祭れり。其の他師範學校、高等女學校、病院、大阪ホテルなど皆中の島にあり。



大阪城は市の東部にあり、天正年間豊太閤の築く所にして今は第四師團の司令部たり。此の城は大阪陣の時、家康の爲めに外郭を毀たれたれども、其の規模猶大にして、周圍一里に餘り、石材の中には長さ數十間のものあり、豊公大量の一斑を見るに足れり。仁徳天皇の高津の宮の跡も大凡此の邊なるべしと云ふ。其の外、高津、生魂、天王寺、桃山等の名勝皆東部に偏れり。高津の社は仁徳天皇、仲哀天皇、神功皇后、應神天皇及び履仲天皇を祭れり、境内高くして老松石階を夾み、社頭の舞臺より見渡せば、大阪の全市眼下に在り、碁盤の如き町筋、櫛の齒の如き人家、蟻の如き往來、虹の如き橋梁、工場の煙筒は林の如く立升る煙は雲の如く、人をして『民の竈は賑はひにけり』の昔を思ひ出でしむ。生魂神社は略稱にして正しくは生國魂神社といひ、即ち生國魂

神、足國魂神等を祭れり。官幣大社にして全國有数の古社なれども、社殿は石山合戦、織田信長と本願寺の戦の時、兵火にかかりて焼けにしを、秀吉の時片桐東市正且元奉行して造營せし處なり。此の境内亦高地にして眺望に宜しく、櫻樹多くして花盛りの頃は遊人群集す。

天王寺も略稱にして四天王寺といふを正しとす。當寺は聖徳太子の建立にして是も有数の古刹なりしに、天正、元和の兵火に焼かれて、今の堂塔は徳川四代將軍家綱の再建なり。境内に蓮池あり、近來又多くの櫻と萩を植ゑて春秋の眺めに供せり。生魂、天王寺より更に東して市街を離るれば、桃山とて一面の桃島あり、春に至れば十里の紅雲、靉靄としてここも亦群集の地となる。所謂『桃李言はざれども下自ら蹊を成す』ものなり。此の邊に



女子師範學校、農學校等あり。

此の外天満の天神座、摩神社、心齋橋の繁華、道頓堀の劇場等見るべき處猶多し。然れども大阪は歴史上關係多き地なるにも拘らず、古跡名所の遊ぶべきもの比較的少く、而して煙筒鐵橋等の壯大は却て兩京の及ぶ所に非ず。蓋し大阪の人士職業に熱心にして風流韻事に違あらざるもの多ければなり。之を世界に譽るに、大阪は我が國內の米國とも云ふべきか。

### 箕面

京都及び其の近國には紅葉の名所多し。先づ京都にては東福寺なる通天橋の紅葉をはじめとし、高雄、梅尾、嵐山等指を屈するに違あらず。近國にては大和の龍田川、手向山、何れも昔よりの名所なり。攝津の箕面はさのみ古き名所ならねど、木の大きると規模

の大なるとは他に勝れり。

箕面山は攝州豊能郡の北部にありて、大阪より五里ばかりの處なり。神崎より阪鶴鐵道に乗れば、酒に名高き伊丹を過ぎて池田に至る。此より山の方に向ひて爪先上りの村道を行けば、處々に枝付の蜜柑、橙、生干の柿などをつるしたる家あり。箕面歸りの土産に買はせんとするべし。斯くて一里餘り行けば箕面の入口にて、南の方田畑打ち開けたる處より、谷の口を尋ねて入るが如き地勢なり。此の邊既に紅葉多し。

谷川に添ひて敷町行けば龍安寺の門に至る。今より一千二百年前、白雉年間、役小角の開基にて、其の傍なる辨天の社は小角の作なる古像を安置し、近江の竹生島、相模の江島、安藝の嚴島と共に日本四所辨天の一なりとかや。



龍安寺の後の道を上れば左は切岸高く峙ち、右は谷を隔てて山々續き互れり。山の木立繁き中に、色濃き紅葉の年古りたるが限もなく蟠りたるに、秋の木の葉の黄ばみたるさへ打ち交りて、げに錦とは是をこそいふべかりけれ。上り行くほど紅葉は愈色深く、谷川の音足の底に響きて、木の實求むる猿の出で入るさまなど、長き山路も飽かず面白し。

斯くて半里ばかり上れば谷窮りて瀧あり。是名高き箕面の瀧にして、十丈餘りもやあらん。絶壁の上より落ち来る水は山姫の布を晒すが如く、差し出でたる岩の上には異様にくねりたる紅葉の、殊に色濃きなど譬へん方なし。

大抵の名所は多くの紅葉を一目に見渡して、酒飲み遊ぶ所の多きに、是は長き谷の間を眺めつゝ行く景色、奥深くして他に異なる

り、凡そ紅葉の規模の廣大なるは西に箕面、東に日光なりといふ。

**有馬と熱海**

日本には温泉頗る多し。其の中にて昔より名高くして今も猶繁昌するは、西に有馬の湯あり、東に熱海の湯あり。有馬は山間にありて夏に宜しく、熱海は海邊にありて冬に適せり。

有馬の湯は攝津有馬郡湯山町にあり、此の町は六甲山の後に當り、山々相重りて三方をかこみ、北方纔に開けたる谷あひなれば、快濶なる眺望はなけれども、閑靜にして空氣冷かに、盛夏の候といへども暑さを知らず、誠に避暑に良き地なり。

戸數四百餘ありて何れも山腹より谷にかけて作られ、温泉場は其の最底地にありて浴室の外観頗る壯麗なり。温泉は鐵分と鹽分とを含み、よく皮膚を刺激して血液を増加し、且防腐、解凝、強壯



等の効あれば、リーマナス及び婦人病等によし。

熱海の湯は伊豆田方郡熱海町にあり。此も亦三方山を繞らし、東南の一方開けて海を受け、氣候溫和にして、冬期の暖かなること恰も春の如し。戸數五百餘あり。市街山に據り、海に臨みて景色よく、建築亦頗る華麗なり。温泉は各所に湧き出でて、其の數二十餘あり。其の最大なるものを大湯といふ。

大湯は間歇泉にして、凡そ三時間を隔てて一晝夜に七八回噴出するを常とす。其の噴出するに當りては、沸湯ほとばしりて、聲雷の如く、蒸氣四邊を蔽ひて、物凄きさまなり。近年之に近づくもの危害あらんことを慮り、四方に鐵柵を廻らして、人の入ることを禁ぜり。湯の質は食鹽泉にして、腸胃病、リーマナスによし。

熱海附近には古跡名勝の訪ふべきもの少からず。町中の温泉寺

は藤原藤房卿出家の後開基したる所にして、其の手植の松は今尙存せり。又加茂御料地は町の西南方にあり。土地の人之を拜借し、梅櫻數千株を植ゑて公園とせり。

### 須磨

攝津の海岸盡くる處を須磨浦といふ。畿内と山陽との咽喉にして、古へは此に須磨關を置かれ、又貴人の謹慎屏居の地たりしと見ゆ。其の後、壽永の亂に源平二家大いに此に戦へり。

されば、須磨は僻地なるにも拘らず、關の址を以て名高く、又貴人の舊跡を以て名高し。且、風光清絶にて、月色殊に佳きを以て、月の名所として古へより天下に聞こえたり。

今、旅行の順序を以て話さんに、兵庫より西に行くこと一里餘にして、天井河あり。是より西の方數十町、攝播の界に至るまでは、須



磨村の地なり、天井河より數町にして、路傍に用水池あり、池を隔てたる丘上の老松は、行平の月見の松と名づけられたり。更に行くこと數町にして須磨寺あり、此に平敦盛の首塚と云ふがあり。又敦盛の遺物と稱する寶物數多を藏して、參詣する人に觀しむ。須磨寺の隣なる源光寺は、俗に光源氏の舊跡と云へり此に芭蕉の句碑ありて、ほり付けたる

見渡せば眺むれば見れば須磨の秋。

源光寺を過ぐれば、古の關屋の址にて、石の榜示あり、前の小流を路守川といふ。此の邊源平時代の古跡と唱ふるもの頗る多し。既にして山陽鐵道の停車場あり。之を過ぎて數町にして一谷に至る。昔平氏が第一の要害と頼みし處も今は沙崩れ谷埋まり、僅に一條の溝を淺し、是に數尺の石橋を架せり。

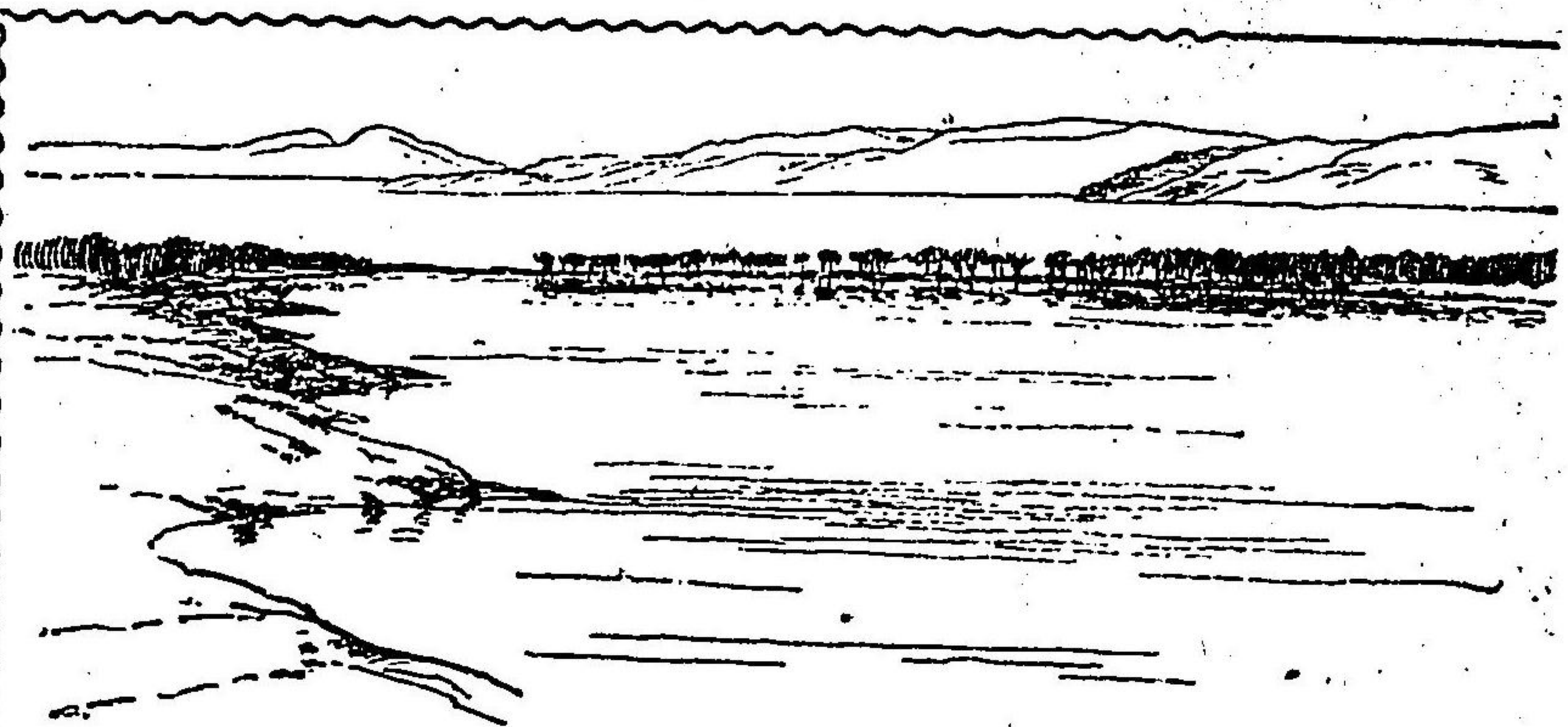
一谷より西國界に至るまで十餘町の間は、鐵拐鉢伏兩山の麓にして、山頂より路傍に至るまで、一面の松林相連なる。須磨御料地是なり。此より眺むれば、前は蒼海茫茫として遙かに紀泉の山を繞らし。左は天井河の沙洲海中に斗出し、右は淡路島呼べく應へんと欲す。平遠明媚既に喜ぶべきに、後ろは則ち御料林の老松、山上に連なるあり。眞に是、パノラマを見るが如し。況や明月中天に懸り、海波銀を磨する時に於てをや。須磨の須磨たる所は唯此の十餘町の間にあると云ふべし。須磨は風景の佳なるのみならず、醫家の説に據れば、空氣清潔、氣候溫和にして、人の養生に宜しきこと亦天下第一たり。近來衛生の學漸く進み、土地の効力を信ずることも漸く深きに隨ひて、須磨に轉地保養するもの日に多きを加ふ。是を以て旅店



別荘、青松白砂の間に相望み、凡そ地の買ふべく、借るべきもの、殆ど餘す所なく、十年前の漁村變じて、雑遷の街とならんとせり。獨り一帶の御料林は固より金力の侵すべきに非ず、人民永く其の賜を受けて之を失ふことなし。富人も往き、貧生も遊び、風景依稀として古への須磨なるは亦吾が帝室の餘光に非ずや。

### 天の橋立

丹後の海、深く與佐郡の地に入る、之を與謝の海といふ。入海の北岸より沙洲長く出でて、殆ど南岸に達す、是即ち天の橋立にして、日本三景の一なり。天の橋立の沙洲は府中村の江尻より出でて、海を横ぎること三十町、其の幅凡そ三十間、一帶の白沙恰も天然の橋の如く、無数の青松其の上に列を成す。松は大小老稚種種なれど、何れも枝を垂



天の橋立

れて地を去ること數尺に過ぎず、遠く之を望めば、海水松の下枝を洗ふが如し。洲の盡くる處に橋立神社あり、一小海峽を隔てて南岸なる吉津村の文珠閣に對す。海峽を文珠の切戸といひ、文珠閣を切戸の文珠といふ。文珠閣の創建古くして、詳かならずと雖も、延喜の御宇に天橋山智恩寺の號を賜ひ、本堂に文珠菩薩を安置して、延喜の勅額を掛く。此の境内に古墳あり、俗に一條の朝の才女和泉式部の墓なりといふ。然れども實は式部の墓に非ずして、其の夫なる丹後守藤



原保昌の墓なり。保昌は當時有名の武臣にして大江山入の昔話せつわに源頼光と共に酒巖童子を討ちし人なり。境内より望めば橋立の松の翠は手を延ばして捉へ得べきが如し。

橋立の眺めは春の霞に宜しく、夏の陰に宜しく、秋の雨に宜しく、冬の雪霜に宜しく、前後左右の眺め皆とりどりに美しからぬはなし。然れども橋立の眺望とりわけよしと稱せらるる所二處あり、一は府中の上に峙てる成相山の半腹にして一は但馬に越ゆる樗峠なり。成相山よりは縦一文字に望み、樗峠よりは横一文字に見る、而して樗峠の眺望最も好し。此の圖は即ち樗峠より見たる景なり。

是も一條の朝の才女なる赤染衛門が歌に

思ふことなくてや見まし、與謝の海の

天の橋立都なりせば。

こは天の橋立が都にあらば、旅の思ひなくして見るべきをとの、心にして、橋立が都に遠きを愁ひたるなり。今や京都鐵道は京都より、阪鶴鐵道は大阪より、並び進みて丹波に入り、遠からず丹後の海濱に達すべし。さらば『思ふことなくて』橋立の景を見るも亦遠きに非るなり。

### 瀬戸内海

須磨の浦より西は白沙青松、相連なりて明石の浦に至る。此の邊は月の名所なるのみならず、近くは淡路島を控へ、遠くは紀泉の山を望み、風景の佳なること海内無雙たり。此の處の海峽を明石の瀬戸といふ。瀬戸内海とは是より西の方、四國、中國及び九州の間にはさまれる海の總稱なり。



此の内海は概ね波平かにして池の如く、其の中に大小の島々、點々相並べるさま譬ふるに物なし。されば、外國人は此を稱して「世界海上の公園」といふとぞ。

瀬戸内海を圍める地方は皆山を貢ひて、何れより吹き來る風も水蒸氣を失ふが故に、空氣は乾燥し、雨量は減少し、海水は鹽分を増す。されば内海の沿岸十州にては製鹽の業甚だ盛なり。

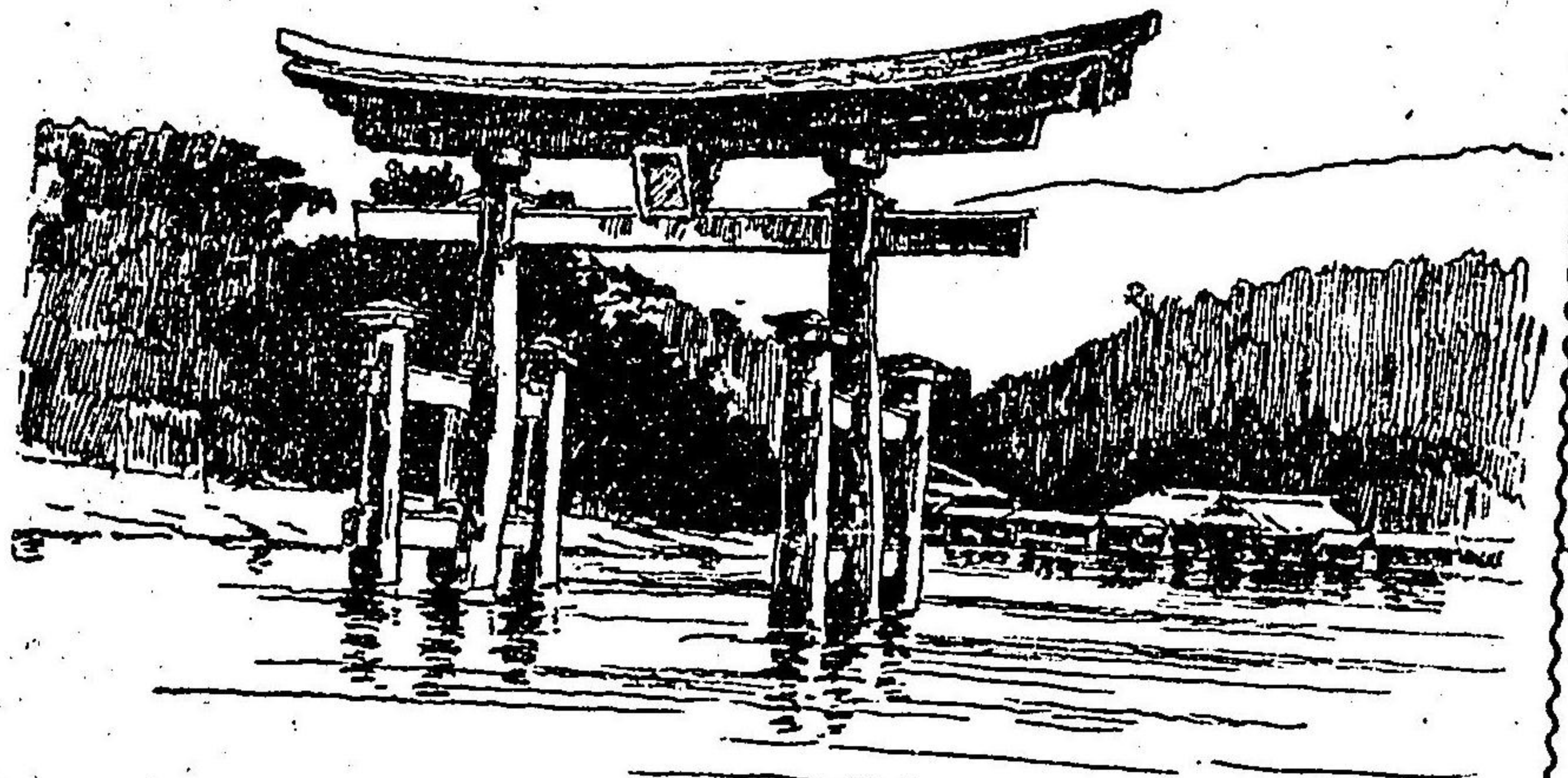
此の地方にて食鹽を製するには、先づ海濱に鹽田を作る。其の作り方は、粘土を以て底を固め、其の上に砂礫を布き、更に細砂を散布して表面を蔽ふ。斯くして、満潮の時に海水を導き入れ、時々之をまきて日光と風とに曝すときは、水分漸く蒸發して多量の鹽分細砂に固著す。是に於て其の砂を水に溶き、釜に入れて之を煮れば、食鹽自ら其の内に結晶す。

鹽の産地にて有名なるは、播磨の赤穂、阿波の齋田及び讃岐の湯元なるが、産額の最も多量なるは、周防の三田尻なり。此の諸國の製鹽を總計すれば、よく國民の需要に應ずる外に、猶年々五百萬斤を輸出し得べしといふ。

### 宮島

日本三景の中にて殊に繁昌する宮島は安藝の嚴島のことなり。嚴島は安藝の本陸に近き一島にして、東西二里、南北一里あり。島の中央に彌山ありて、其の北麓に嚴島神社鎮座す。是即ち諸人の參詣し、遊覽する處なり。祭神は素戔鳴尊の御子市杵島姫命を主とす。俗に辨財天即ち辨天と申す。社の正門なる大鳥居は遠く海中の沙上に立てられ、山陽鐵道の宮島驛は其の正面に對せり。汽車の著する毎に汽船ここを發して乗客を嚴島に送る。





船の嚴島に向ふや、まづ旅客の注意を引くは大鳥居なり。大鳥居は皮をむきたる儘の自然木にして柱の高さ七間に餘り、周り五間に餘り、さながら海龍王が兩手を以て差し揚げたらんが如し。額は故有栖川大將の宮の御筆にして、昔の額は表は小野道風、裏は弘法大師の筆なりしといへど、今傳はらず。潮満つる時は、參詣の船舶帆を揚げて鳥居をくぐり入るさままづ類なき景色なり。

嚴島港より上陸して社殿に參拜す。本

殿幣殿拜殿、秘殿ありて莊嚴を極め、其の前に舞臺あり。舞臺の端は遠く海中に突出して、火燒前といひ、一大燈籠を建てて大鳥居と相對す。社殿の左右に廻廊あり、種種に屈曲して沙洲の上を遶ること百五十間ばかり、一間毎に鐵燈籠を掛く。潮來る時は廻廊恰も浮ぶが如く、燈影波に映じて、昔話の龍宮城も斯くやと思ふばかりなり。

廻廊の額面には古今の名家の書畫を懸けられたり。畫には兆殿司、土佐光信、狩野探幽、應舉、狙仙等の傑作數ふるに違あらず。又此の社は昔平清盛が深く信仰せし處なれば、平家の人人の寫せる經文、繪畫を始め、名高き人の用ひたる武具等の寶物甚だ多し。社殿より西の濱邊を行けば、大元浦あり、後ちの岡は昔嚴島の戦に毛利元就に亡ぼされたる陶晴賢が陣所の跡なりといふ。社殿



より東の濱邊には大宮の岡ありて、岡の上には豊臣秀吉の建てたる千疊敷あり、今此の閣内に豊國神を祭れり。此の間名所舊跡猶多し。社殿の後ろなる岡の奥には紅葉谷あり、櫻、紅葉いと多く、御手洗川の水源は潺湲として清く、流れ、神鹿人に馴れて樹下に群れ遊ぶさま恰も仙境に入るが如し。舟行を好む人は猶舟を雇ひて島を一周す、之を島巡り又は七浦巡りといふ。山行を好む人は草鞋の紐を結びて彌山に登る。一の鳥居を過ぎ、登ること幾ばくならずして瀧の宮に至る。後ろの山に白絲の瀧あり、高さ十二丈、幅三丈にして、夏の夜には螢多く、ながら純白の薄衣に金剛石を飾りたらんが如し。登り登りて嚴島神社の奥の院なる御山神社を拜し、遂に絶頂に至る。絶頂には頂上石とて、高さ三丈ばかりなる大岩屹然として立てり。岩下に

立ちて眺むれば、中國山脈蜿蜒として周防に走り、内海の島嶼眼下に散在して、基石を見るが如し。蓋し中國有数の壯觀なり。更に歸路の勝を探りて紅葉谷に歸れば、旅亭清潔にして一宿するに堪へたり。嚴島町は戸數すべて一千、人口四千にして、什の八九は旅客によりて生業を営めり。此の地の名産は宮島細工とて、挽物細工、竹細工、鹿角細工、貝細工等なるが、近頃學校にて繪畫、手工を教授するにより、繪様彫刻、往往觀るべきものあるに至れり。

### 耶馬溪

九州にて山水の最も名高き處は耶馬溪なり。溪は豊前の國の山國川に沿ひたる一帯の地にして、凡そ七里に亘る、鮎歸といふ處より景色漸々面白く、佛地、青のトンネルを過ぎて羅漢寺に登れ



ば、山容水態甚だ雄奇なり。寺は山をほりて造れる古刹にして窟の中に五百の羅漢を安置せり。

青村より西は群峰水を挟みて立ち、満山皆石なるもあり。石破れて洞穴をなせるもあり。兩石相闘ひて、其の一方將に仆れんとするさまなるもあり。數層の石、相重なりて夏雲の狀をなせるもあり。其の石間より生じたる樹木は或は横に、或は縦に、或は倒さまに仆れて復起き、起きて復仆れ、龍の雲を得て天に昇らんとするが如きもあれば、猿の臂を伸して、溪流を掬はんとするが如きもありて、悉く其の趣を異にせり。

山容の奇なること斯くの如くなれば、溪水も亦随つて變化窮りなく、岩をかみ石に激して雷の如く響き、雪の如く散り、峰影を碎きて流る。

溪の中央に柿坂村あり、四邊の光景譬ふるに物なし。愈進めば、彦山高く雲際に聳えて、一步は一步よりも美なり。殊に猿飛の怪巖に至りては、造者が力限りの技術を盡せるが如く、觀るものをして覺えず、絶妙と叫ばしむ。

耶馬溪は元山谷といひしを、頼山陽嘗て此の地に遊び、文を作りて其の美を述べ、且耶馬溪の字を當てしより、今は一般に其の名をよぶに至れり。

## 青年之友

名勝記事 終



明治三十五年六月二十日印刷  
明治三十五年六月廿五日發行

青年の友名勝記事

定價金拾貳錢

金港堂書籍株式會社編輯

發行者兼印刷者

金港堂書籍株式會社  
東京市日本橋區本町三丁目十七番地

代表者

右社長

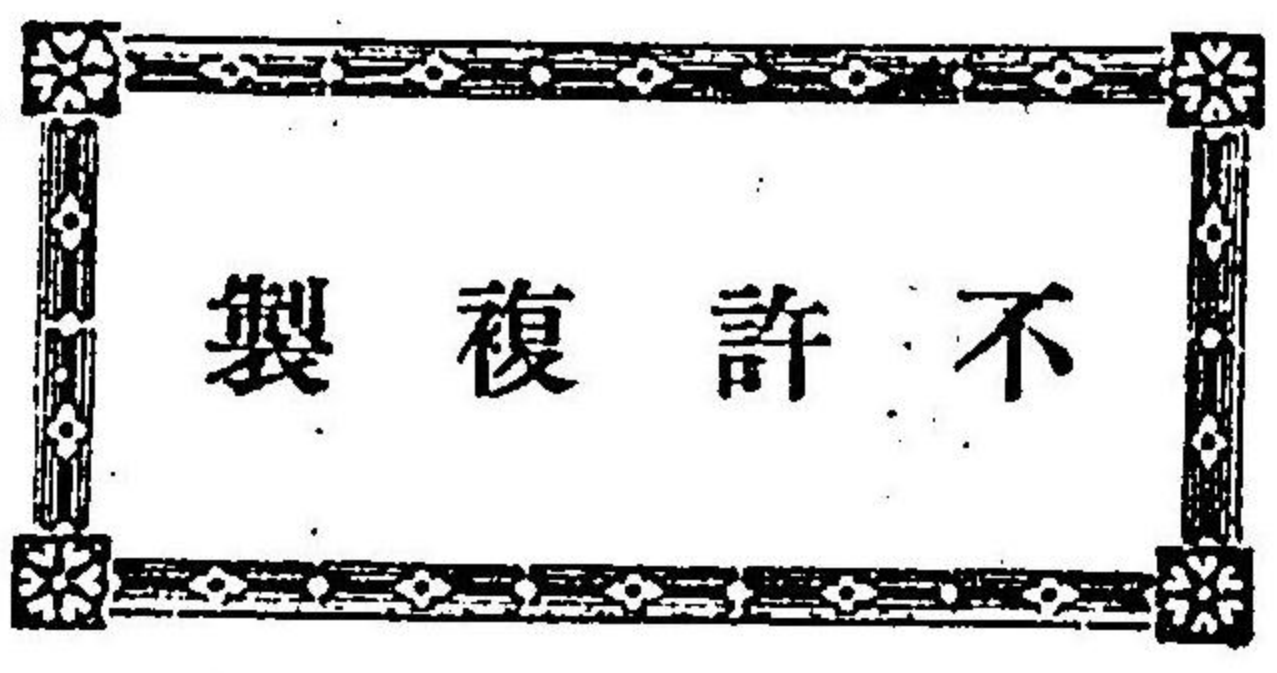
原亮一郎  
東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地

印刷所

三協合資會社  
東京市京橋區弓町廿四番地

賣捌所

各府縣特約賣捌所



不許複製



